

大宮遺跡第1次発掘調査概報

1 9 7 8

広島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

序

神辺平野は備後南部における遺跡の宝庫といえます。平野全域が遺跡といっても過言ではありません。しかし、この遺跡の宝庫も、福山市のベッドタウンとして都市化の波に洗われ、区画整理や宅地造成などで次第に貴重な遺跡が失なわれていきます。

このたび当研究所が調査を担当した大宮遺跡も、区画整理に伴う道路工事中に発見された遺跡で、本格的な工事に対処して第1次の調査を実施したものです。発掘調査の結果、はからずも弥生前期の環濠らしき遺構を検出することができました。また、出土した多量の弥生土器は、備後における弥生前期の基準資料ともなる貴重なものです。また、焼けた壁土や灰炭層の検出から、工房跡の存在も予想されます。ただ、今回の調査は短期間であったため、住居跡など集落の様相を明らかにするまでには至りませんでした。前期の溝の外に中期の一回り大きな溝も検出されており、この地域が弥生時代前期から中期にかけての広大な集落跡であることは明白です。今後の調査によっては生活跡のみならず水田跡の検出も可能で、備南における稲作農耕の始原を解明する重要な遺跡となることでしょう。

さて、ここにその成果の一端をまとめることができました。課題の多くは今後の継続調査にかかっていますが、この概報によって遺跡の重要さは充分御理解いただけるものと思います。

なお、発掘調査にあたっては土地所有者ならびに神辺町・神辺町教育委員会・湯野土地区画整理組合より多大な御協力をいただきました。また、遺構遺物の検討については広島大学文学部考古学研究室、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの御指導をいただきました。ここに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

最後に、この報告が神辺平野における遺跡保護の契期となることを期待して発刊の辞といたします。

1978年3月

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所長

松 下 正 司

目 次

序

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の経過	(4)
IV 遺 構	(5)
1 溝	(5)
2 土 壙	(7)
3 柱 穴	(8)
V 遺 物	(9)
1 土 器	(9)
2 石 器	(13)
3 そ の 他	(16)
VI お わ り に	(17)
付1 土器観察表	(18)
2 石器計測表	(22)

図版目次

図版 1	大宮遺跡全景
図版 2	27区全景
図版 3	検出遺構 I
図版 4	検出遺構 II
図版 5	遺物出土状況
図版 6	土器 I
図版 7	土器 II
図版 8	土器 III
図版 9	石器 I
図版 10	石器 II・土製品・骨製品・種子

図表目次

第 1 表	SD001溝出土土器文様表……(11)
第 2 表	大宮遺跡出土土器編年表……(12)

挿図目次

第 1 図	大宮遺跡位置図……(3)
第 2 図	大宮遺跡地区割図……(23)
第 3 図	27区平面図……(巻末折込)
第 4 図	S D 001・002溝断面図……(6)
第 5 図	土器実測図 I ……(24)
第 6 図	土器実測図 II ……(25)
第 7 図	土器実測図 III ……(26)
第 8 図	土器実測図 IV ……(27)
第 9 図	土器実測図 V ……(28)
第 10 図	土器実測図 VI ……(29)
第 11 図	土器実測図 VII ……(30)
第 12 図	石器実測図 I ……(31)
第 13 図	石器実測図 II ……(32)
第 14 図	石器実測図 III ……(33)
第 15 図	石器実測図 IV・土製品 骨製品実測図……(34)

例 言

1. 本書は、昭和52年度(第1次)大宮遺跡発掘調査概報である。
2. 第1図の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭53中複・第60号
3. 本概報は、松下正司の指導のもとに、I・III・IV・V-2・3・VIを小都隆、II・V-1を上村和直が分担して執筆し、小都が編集した。
4. 出土遺物の整理は広島県草戸千軒町遺跡調査研究所所員が行ない、遺物の実測、トレスは執筆者、遺構・遺物の写真撮影は福井万千・鹿見啓太郎が担当した。
5. 本概報に記した記号SDは溝、SKは土城、SXはその他の遺構を示す。

I はじめに

大宮遺跡は広島県深安郡神辺町大字湯野字丸畑(通称大宮)にある。

山王山東麓の大宮地区一帯では、耕作中に時折土器が採集されることから、大規模な弥生時代の包含地があるのではないかと注意され、文化財保護委員会の『全国遺跡地図(広島県)』1967にも「大宮遺跡」として記載されていた。ところが昭和48年、この地域に湯野土地区画整理組合が設立され、周辺一帯で大規模な区画整理が行なわれることになった。そこで昭和49年には4月と11月の2回にわたり神辺町教育委員会により遺跡の北側に隣接する伝備後国府跡(方八町遺跡)の内容ならびに範囲の確認調査が行なわれたが、国府に関連する遺構、遺物は検出できず条里制に伴う地割の確認と北側で弥生土器・土師器・須恵器を多量に含む池状の遺構を検出したにすぎなかった。⁽¹⁾これにより南側では都市計画街路の建設が開始されたが、昭和50年には用地内一角(27区)の街路側溝工事中に多量の弥生土器が発見され、地元の「神辺郷土史研究会」をはじめとする郷土史家、研究者などの注目するところとなった。⁽²⁾このため、これに隣接する22・29区を南北に走る街路側溝の建設にあたっては昭和51年1月に御領遺跡の調査を担当していた草戸千軒町遺跡調査研究所が試掘調査を行なって、弥生時代の溝・柱穴などがあることを確認し、記録に残した。こうした経過から遺跡の保存対策を講ずるため広島県教育委員会は国庫補助金を受けて継続調査することとし、本年度は草戸千軒町遺跡調査研究所が発掘調査を担当した。

調査は、昭和52年12月5日から昭和53年1月10日までの23日間、以下の調査員で実施した。松下正司(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所所長)、北川英雄(同主任主事)、小都隆(同文化財保護主事)、福井万千(同指導主事)、鹿見啓太郎(同)、篠原芳秀(同)、志田原重人(同)、上村(旧姓志道)和直(同調査補助員)、糸井崇雄(同)、佐藤昭嗣(神辺町教育委員会主事)。

また、潮見浩(広島大学文学部助教授)、川越哲志(同助手)、河瀬正利(同)、工樂善通(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室室長)の各氏からは適宜指導助言を得、地元の神辺町、神辺町教育委員会、菅波哲郎(県立神辺工業高校教諭)、脇坂光彦(県立府中高校教諭)佐藤一夫の各氏、さらには作業員の方々にはなにかとお世話になった。

なお土地所有者の佐藤守、山下主、金島寿逸、神原健次郎の各氏からは快く土地の発掘承諾をいただくなど多大な協力を受けた、記して謝意を表したい。

注

- (1) 松下正司、鹿見啓太郎、加藤光臣「神辺方八町(推定備後国府跡)の調査(一)(二)」調査研究ニュース「草戸千軒町遺跡」No.17・19、1974・1975年
- (2) 神辺郷土史研究会「弥生時代の神辺-75年度活動報告-」『神辺の歴史と文化』第3号、1975年

II 位置と環境

神辺平野は広島県の東部を流れる芦田川によって形成された東西に長い平野で、大宮遺跡は平野の東部、山王山丘陵の東側に位置している。北・南・東は山に囲まれ、西は要害山・山王山の低丘陵によって平野の西部・中央部とは隔てられている。平野の東部では北東から西南へ高屋川が蛇行しながら流れ芦田川に合流しており、現在は広い水田となっている。現在の高屋川は平野の南山麓を流れているが、旧河道はかつて国鉄井原線が通っていたあたりであり、平野の中央を流れていたものと推定される。神辺平野は芦田川・高屋川などによって峡谷から平地に放出された土砂が堆積した沖積平野であり、大宮遺跡の立地している場所は高屋川に沿った自然堤防上である。この自然堤防と山王山や北側の丘陵との間には後背低湿地が形成され農耕に適した場所であったろう。遺跡の標高は14mで現在の高屋川川床との比高は約2mある。神辺平野は高屋川が改修される以前、大正時代まで何度も洪水にあっており、弥生時代においても高屋川の氾濫原であり、絶えず洪水の危機にさらされていたものと考えられる。

気候は瀬戸内海性気候に属し、温暖で降水量は少ないが高屋川などの豊富な水があり、弥生時代以降の農業環境はきわめて良好であった。

次に神辺平野東部における縄文時代後期から弥生時代にかけての遺跡分布をみてみよう。

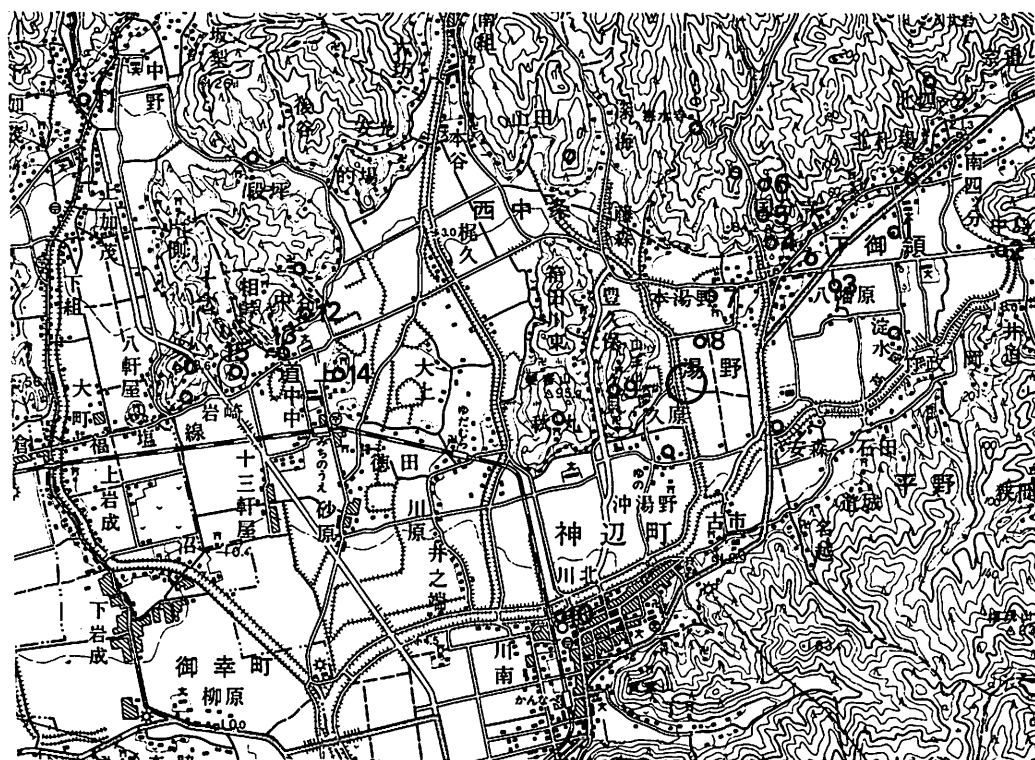
縄文時代後期の遺跡には御領遺跡(3)、岡遺跡(11)などがあり、晩期の遺跡には中島・丹花遺跡(2)、大宮遺跡、岡遺跡、国分寺裏山遺跡(5)などがある。北辺の丘陵端や沖積地に位置したものが多く、御領遺跡、中島・丹花遺跡、大宮遺跡などは弥生時代の遺跡の立地と同様な平野部に位置しており、注目される所である。

縄文時代も終り頃になると北九州に入った弥生文化は急速に西日本一帯に広がり、各地に弥生時代の遺跡を残している。弥生時代前期前半の遺跡としては亀山遺跡(14)をあげることができる。この時期の遺跡は広島県内でも他に広島市中山遺跡をあげるのみであり、瀬戸内海沿岸でも数少なく、点的な分布をしめしている。

前期後半になると遺跡の数が増え、先の亀山遺跡を含め大宮遺跡、方八町遺跡(8)、おなか遺跡(1)などがあり、福山湾沿岸では福山市草木遺跡、同ザブ遺跡、同本谷遺跡、同草戸千軒町遺跡などがある。これらは亀山遺跡を除き丘陵周辺の平野部に立地しており、沖積平野の狭い後背低湿地を水田として利用した小規模な水稻耕作を行っていたものと考えられる。

中期の遺跡は前期後半に出現した遺跡が継続するケースが多いが、その他に新たな遺跡も出現している。前期に出現した亀山遺跡、大宮遺跡、おなか遺跡を始めとして領家遺跡(10)、中島・丹花遺跡、表山遺跡(6)、御領遺跡、道上小学校校庭遺跡(13)、中谷遺跡(12)、西組遺跡(15)などがあり、平野部だけでなく、周辺丘陵上にまで遺跡が分布している。この遺跡の増大は前期からの低湿地水田を増加させ、また谷水田などを利用しはじめた結果であろう。

後期になると中期以上に遺跡が増加し平野部、丘陵部のみでなく山間部にまでみられるよう



第1図 大宮遺跡位置図（5万分の1，井原）

○は大宮遺跡 ○は縄文・弥生遺跡

- | | | |
|------------|----------|---------------|
| 1. おなか遺跡 | 6. 表山遺跡 | 11. 岡遺跡 |
| 2. 中島・丹花遺跡 | 7. 正殿寺遺跡 | 12. 中谷遺跡 |
| 3. 御領遺跡 | 8. 方八町遺跡 | 13. 道上小学校校庭遺跡 |
| 4. 国分寺下層遺跡 | 9. 山王山遺跡 | 14. 亀山遺跡 |
| 5. 国分寺裏山遺跡 | 10. 領家遺跡 | 15. 西組遺跡 |

になる。中期から継続した中島・丹花遺跡，御領遺跡などと共に新たに国分寺下層遺跡(4)，正殿寺遺跡(7)，方八町遺跡，山王山遺跡(9)など多くが分布している。後期には低湿地農耕だけでなく，灌漑等の技術を用いて耕地開発が進められ，生産力が増大したものと考えられ，以前に比べ大きな集落が推定されている。

参考文献

村上正名「弥生時代」『福山市史』上巻 1963年

神辺郷土史研究会「弥生時代の神辺」『神辺の歴史と文化』第3号 1975年

小都隆「芦田川水系における縄文時代遺跡の分布について」『考古論集』1977年

III 調査の経過

今年度の調査は東西街路の建設が予定されている13～15区について昭和52年12月5日から1ヶ月間の予定で開始したが、この区域では明確な遺構を検出できなかったため、ひき続いてかって多量の遺物が採集された27区の調査を実施し、昭和53年1月10日に終了した。

調査にあたって遺跡の地区表示は、遺物を包含すると考えられる深-water川東岸の東西約120m、南北約350mの計約40,000㎡について、北西端から東・南方向へ田の区画毎に01, 02, 03……37, 38, 39と地区割を行ない、弥生時代の集落跡を示す3Lと大宮遺跡の頭文字をとってOM、さらに田の区画による地区番号00、つまり3LOM-00と表示した。このうち04～39区に至る南北の都市計画幹線街路、ならびに02～27区、01～31区の南北、26～29区の東西街路はすでに完成している。また測量の基準線は遺跡の東縁を南北に走る幹線街路縁とし、今回の基準線はこれと平行に走る36号街路東縁とした。この基準線は磁北よりN4°18'15"Wの方向である。

13～15区の調査は、13・14区の全面と15区はその中央部を新設の南北街路が走っているため西側半分のみ計1,100㎡について実施した。調査は基準線に直角方向で、13～15区を通したものと、それに直交して各区に2本ずつの計7本のトレンチを設定し、遺構の確認を行なった。14, 15区では耕作土を取り除くと自然堆積と考えられる黄灰色粘土層があらわれ、下部の暗灰色粘土層へ続いていた。13区でも耕作土下には黄灰色粘土層がみられたが、攪乱されたものか汚れており、その下には黄褐色粘土層さらに下には鉄分を含んで固く締った灰褐色砂質土がみられた。これは深くなるほど固くなり岩盤が風化したものかもしれない。遺物はこの灰褐色砂質土上あるいは黄褐色粘土層中に若干の弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦などが含まれていたが、各種のものが混在し磨滅したものが多くことから二次堆積と考えられよう。

27区はその中央を新設の東西街路が走っているため北半のみ約450㎡について調査を実施した。調査区は基準線に平行と直角方向に1辺6mの方眼で区切り、北西端から東・南方向へ1～17区、さらに西端を北から18～20区と計20区を設けた。調査はまず1～5区の東西方向、1～17区の南北方向へそれぞれ3m幅でトレンチを設け、遺構の分布と土層の確認を行なったが、厚さ約20cmの耕作土下には基盤である黄色粘土層が広がっており、それに15区では幅約2mの溝が東西に、3・4区ではその境界付近にやはり幅2mの溝が南北に走っていた。さらに5区東半も若干攪乱されているようで、1・2・6区では柱穴らしいものもみられた。以上のことから27区は全域にわたりなんらかの遺構が広がっていることが予想されたため、全面を調査することとし、結果的には4区から15区へ湾曲してつながる溝SD001、5・10区にみられる溝SD002、SD001に囲まれた内側にみられるSK011～022などの土城、さらには多数の柱穴などを明らかにした。遺物はこの遺構面全域に散布していたが、特にSD001には多く、弥生土器が整理箱に約100箱、石器約150点、安山岩剥片約1100点などを明らかにした。

このように27区以外では特記することはないため、以下の記述は27区に限ることとする。

IV 遺 構

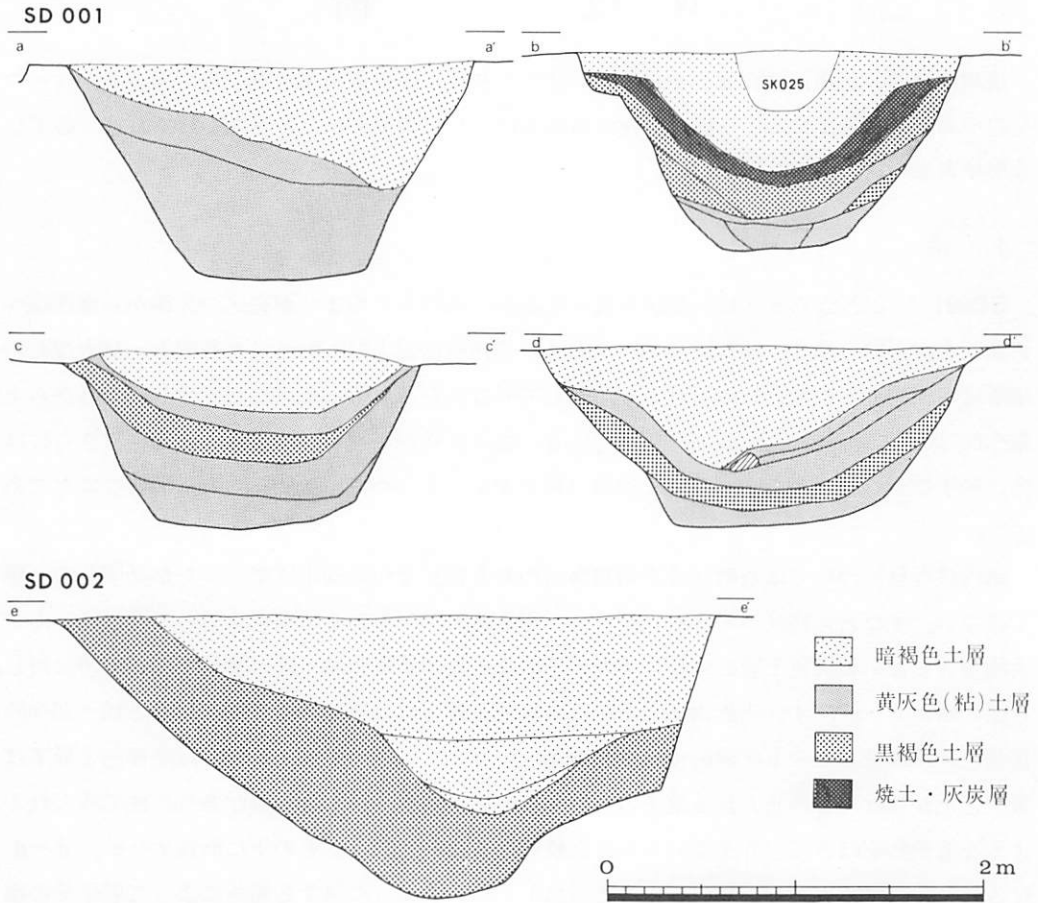
遺構には溝、土塀、柱穴などがある。いずれも耕作土下の黄色粘土層上面で明らかになったものであるが、後述するように遺構検出面は水田として開墾されたとき削られており、必ずしも旧地表面を示すものではない。

1. 溝

SD001 04区から8・12・15区を通して20区へぬける、つまり調査区の北端から南西端へ湾曲しながら続く溝で、幅1.9~2.3m、深さは遺構検出面より0.9~1.1mを測る。長大なため場所によって若干の変化はみられるが、概して底は0.7~1m幅で平坦にしており、それから上端へ60°以上の急傾斜ではほぼ直線に削っている。従って底から地表へは深さと急傾斜、さらには底に若干ながら湧水があり、湿気で壁面の粘土がすべるためによじ登ることは困難なほどである。

溝内の堆積については数箇所断面観察用の畔を残しながら掘下げていったが必ずしも一様ではない。すなわち15区の断面a-a'では、厚さ20~70cmもある暗褐色土層の下にはほとんど遺物を含まない黄灰色土層があり、それがそのまま底の黄灰色粘土層に連続しているのに対し、8区の断面c-c'、4区の断面d-d'では黄灰色土層下には遺物を多量に含む厚さ10~20cmの黒褐色土が堆積しその下に黄灰色粘土層があった。また12区の断面b-b'では暗褐色土層下は黄灰色土が焼けたと考えられる焼土のブロックや灰・炭を多量に含む層があり、他でみられるような有機物をほとんど含まないものとは様相を異にしており、その下に断面c-c'、d-d'にみられる黒褐色土がみられた。このように1本のつながった溝でも場所によって若干その堆積は異なっている。基本的には底から黄灰色粘土層、黒褐色土層、黄灰色土層、暗褐色土層の4層の堆積が考えられよう。このうち底の黄灰色粘土と上部の黄灰色土は遺構の基盤である黄色粘土に若干の有機物が混入したもので、底の黄灰色粘土は若干の灰色粘土を含むがほとんど汚れておらず短期間のうちに人為的に埋められたことが考えられ、上部の黄灰色土も若干の遺物を含みはするが固く締められており底の黄灰色粘土と同様に人為的に埋められたもの、つまり溝底のかさ上げなどが行なわれたことが考えられる。これは上部の暗褐色土層、下部の黒褐色土層に多量の遺物を含みながら、その内容はやや異なっていることから時期差をあらわすものと考えられよう。以上のことから本報文では暗褐色土層を上層、黄灰色土層・黒褐色土層・黄灰色粘土層をあわせて下層として記述した。

なお15区東半から16区にかけては断面a-a'に明らかなおお、黒褐色土の堆積がみられず黄灰色粘土が上部の黄灰色土と連続している。これは溝を分離するように長さ約4mにも及んでおり、上部が平坦なこの高まりの東端には径50~60cm大の土塀もあることから一時は陸橋状の役割をはたしたものと考えられる(SX030)。



第4図 S D001・002溝断面図

また12区では断面 b-b' にみられるとおり暗褐色土層下の黄灰色土が焼けており、灰や炭と共に焼けたスサ入の粘土塊が層をなして堆積していた。これについては(1)黒褐色土の堆積によって浅くなった溝の上で多量の火を使用したため、あるいは(2)周辺部で多量の火を使用し、それを黄灰色土の代りにこの部分に埋めたためという2つの考え方ができよう。前者の場合、黒褐色土層上面をある程度整地し、中央部をやや掘り凹めて二重底風の溝としていることが観察されたことから、火の使用を容易にした、例えば土器の焼成壙などが考えられる。また後者の場合だと、この種の焼けたスサ入粘土塊や、灰・炭は、この部分のみではなく15・20区などの調査区南半部分、あるいは3区にも部分的に広がっていたことから、他の地域で焼いて残った粘土塊や灰・炭を集め埋土として用いたということが考えられる。残念ながら今回の調査ではこの遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

SD002 調査区東端の05・10区を南北に走る幅3.5m以上の溝で、東壁は調査区外になるため明らかにできなかった。深さは検出面より1.5mを測るが壁面は傾斜が緩く、底は二重に掘凹

めて幅0.7mの小溝状になっている。そのため底の下部溝の両側は幅約0.5mのテラス状になり、東側テラスには径5～10cm大の丸太の杭が0.4～1.0m間隔で打込んであった。

溝内は底から壁面にかけて黄色粘土に有機物が混った黒褐色粘土層が厚さ約50cmにわたって広がっており、その上に灰色砂と遺物を多量に含んだ暗褐色土が堆積していた。堆積の状況はSD001とは異なるが、前者と同様に一旦掘った溝底を黒褐色粘土で埋め浅くしているようで、灰色砂層・暗褐色土層は一時期後の溝として用いられたものと考えられ、その底に灰色砂層がみられたことから水が溜っていたことも考えられる。

以上のようにこの溝も暗褐色土層・灰色砂層(上層)と、黒褐色粘土層(下層)とで完全に分離できるが、それぞれに含まれる遺物は下層ではSD001にみられるもの、上層ではより新しいものと時期的に異なっており、底を上げるなどの改修をしながら長期にわたり使用したものと考えられる。

2. 土 壌

SK011 SD001にそって15区で発見されたもので1辺約1mの隅丸方形をなし、ほぼ垂直に深さ25cm程掘込んでいる。内部から若干の弥生土器が出土したが時期は明らかでない。

SK012 SK011の東に約1.5m離れてみられるもので、1.2×0.8mの長方形をなし深さ40cmを測る。層位的にはSX030の黄灰色土上にあたり、内部には暗褐色土がつまっていた。また無文で長胴の壺や、貼付凸帯やへら描沈線を施した壺、多条のへら描沈線をもつ甕などが多量に出土しており後述のSD001上層様式あるいはそれより若干新しい時期のものと考えられる。

SK013 SK012と同様の規模、形態をなすもので、それより東に約2m離れた位置にある。内部には暗褐色土がつまっており、底に接して多量の土器も検出された。土器の内容はSK012のものとはほぼ同様で同時期と考えられるが、なかには甕と蓋が完形でセットになったものもあり、こうした土器などの埋蔵用の土壌であったのかもしれない。

SK014 SK012の北3mにある浅い不整形の土壌で、若干の弥生土器が出土した。

SK015 SK013の北約2mにあるもので、浅いが1.6×1.0mのやや大きめの方形をなす。底からはSK012内の土器と同様な特徴をもつものが出土したが、上部はかなり削平されているようで内容的にはSK012・013と同様なものであったことが考えられる。

SK016 SD001埋没前に掘られた土壌だが、それとの前後関係は明らかではない。長辺約3mの方形をなすらしく、深さは20cmを測る。底は平坦で一方には径30cmの柱穴があり他方は1辺約1mの土壌SK017に切られており、その他の部分には焼土・炭が薄く広がっていた。この焼土は先に記したSD001-12区の暗褐色土層下の焼土層に通じるものであり、位置的にも接することからそれに関係するもの、あるいは一連のものとしてとらえられるものかもしれない。なお内部からは多量の土器が出土したがへら描沈線や貼付凸帯の壺、へら描沈線の甕などがありその他に1片ではあるが貝殻木ノ葉文のついた土器片が出土して、SD001上層のものと接合

した。

SK018・019 7・8区で発見された長径1.5mを越す不整形の土壌で、いずれも内部には若干の弥生土器が含まれていた。

SK020 径1m、深さ40cmのほぼ円形をなす。内部からは近世陶磁器が出土した。この東約7mにあるSK021も近世のものである。

SK022 一辺約2mの浅い土壌でSD001に切られている。

SK025 SD001埋没後に溝上に掘った土壌で、土層が溝上層の暗褐色土と同様であったことからプランは明らかにできなかった。ただ径約50cm、深さ約30cmの範囲にほとんど土を含まないほど土器が詰められており、これが土壌の範囲と考えられよう。内容的にはSD001上層のものと変化はなく、時期差もほとんどないものと考えられる。

3. 柱 穴

SD001に囲まれた範囲内で、柱穴と考えられるものが多数検出された。特に1・2区に多くSD001溝とはやや離れた位置が多いといえるが、面的につながりをもつと考えられるものは明らかにできなかった。大半のものに弥生土器などの遺物が混入していたが深さ、径とも20～40cm大の小形のもが多く上部が削平されたものようである。

以上のように今次調査区ではSD001溝を中心に多くの遺構が検出された。SD001は調査区外の北・西方向に弧状をなして連続しており、かなりの規模であったことが予想される。西方部分については、西約20mの位置が昭和51年に試掘調査されており、幅1.8m、深さ50cmの溝が確認されている。これは今次調査のものに比べ深さが約50cmも浅いが、当時の断面図をみるとSD001の基本的層位である暗褐色土層、黄灰色土層、黒褐色土層、黄灰色粘土層のうちの黒褐色土層までしか調査していなかったためと考えられ、そうすると堆積、規模とも今次調査区のものに類似し、つながることが予想される。その場合、仮にこの方向で延長していくものとするならば、径約80mの環状をなすことになる。またSD002は、その一部しか確認できなかったが、昭和50年に行なわれたこの南に接する街路側溝工事の際、溝状の落込みが続いていたことが注意されており、そこから多量の弥生前・中期の土器が採集されている。また西側では試掘調査時にSD001の延長と考えられる溝の南に約10m離れて大きな溝が確認されており、これらを総合するとSD001の外側に沿ってもう一重の溝が巡っていたことが考えられる。

なお溝に囲まれた部分では、土壌や柱穴などが明らかになったが、時期的にはSD001より古いもの、埋没時のもの、それより若干新しいものなどがあり複雑な様相を示している。また場所によっては上部がかなり削平されたと考えられる部分もある。従ってこれらを時期毎に面的な広がりとしてとらえることはできなかった。

V 遺 物

1. 土 器

土器は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土した。特に27区SD001・002溝からは弥生土器編年の基準となる資料を得た。そこで今回はこの遺構から出土した土器を一括して報告することにした。

(1) SD001溝出土の土器

SD001溝は下層黒褐色土と上層暗褐色土の土器包含層がほとんど土器を含まない黄灰色土の間層によって分離されている。上・下層の遺物は接合することなく、層位的に区分され、それぞれに時期的なまとまりがあることから、今回の報告では下層の土器をSD001下層様式、上層の土器をSD001上層様式と呼んで分けて記述することにする。

a SD001下層様式の土器

器種には壺・甕・鉢・蓋がある。土器は砂粒を多く含み、特に甕には多い。色調は暗褐色・赤褐色のものが多く、黒斑が付いたものもある。

壺形土器(1～18・61～66) 壺には胴部が扁平なものと長胴なものがあるが前者は少なく、口縁端部に刻目を施すものも若干ある。成形は粘土円板を底部としてその上に粘土紐で成形しており、平底である。外面の調整はへら磨きで、内面もへら磨きしたのものもある。施文は調整後に行なうものが多く回転台を利用している。壺は頸部・肩部・胴部の施文手法により次のように分類できる。壺A) 無文のもの(11)。壺B) へら描沈線のもの(1～4)。壺C) 段を作りその下にへら描沈線を施すもの(8・9)。壺D) 削出凸帯のもの(5～7・63～65)。壺E) 貼付凸帯のもの(15)。壺F) 削出凸帯とへら描沈線のもの(13)。壺H) 削出凸帯と貼付凸帯のもの(12・18)。壺I) 2本以上のへら描沈線間に縦沈線を施すもの(14)。壺J) 2本以上のへら描沈線間に刺突文を施すもの(66)。さらに、口縁内面にへら描沈線を施すもの(61)がある。また無頸壺(17)が数点出土している。

甕形土器(20～28・67・68) 甕は胴が張らないものがほとんどである。口縁部はくの字状に外反するものと大きく外反して平坦になるものがある。口縁端部に刻目を施すものも若干ある。成形は壺と同じく粘土円板成形であり、平底である。また底部に焼成後の穿孔が見られるものもある。内面の調整はへら磨きであり、外面もへら磨きを行なうものが多い。ほとんどのものにスガが付着している。甕は胴部の施文手法により次のように分類できる。甕A) 無文のもの(28)。甕B) へら描沈線のもの(20・22・23)。甕C) 段を作るもの(21)。甕D) 段を作りその上にへら描沈線を施すもの(24)。甕E) 削出凸帯のもの(25)。甕G) 2本以上のへら描沈線間に縦沈線を施すもの(26・67)。甕H) 2本以上のへら描沈線間に山形文を施すもの(27)。

甕 I) 2本以上のへら描沈線間に刺突文を施すもの(68)。

鉢形土器(29・30) 鉢には口縁部が外反するものがある。無文であるが、へら描沈線を施すものもある。底部は粘土円板成形で平底である。内外面共にへら磨き調整である。

蓋形土器(31~35) 蓋には壺用の小形と甕用の大形のものがある。壺用には円盤形(31)と笠形(32~34)とがあり、甕には笠形(35)がある。成形は手づくねである。

b SD001上層様式の土器

器種には壺・甕・鉢・蓋・ミニチュア土器がある。胎土・色調は下層と同様である。

壺形土器(36~46・69~78) 壺には長胴で、口縁端部に刻目を施すものがある。成形調整は下層と同様であるが、内面をへら磨きするものは少ない。壺は頸部・肩部・胴部の施文手法により次のように分類できる。壺A) 無文のもの。壺B) へら描沈線のもの(36・42・45)。壺C) 段を作りその下にへら描沈線を施すもの、壺D) 削出凸帯のもの。壺E) 貼付凸帯のもの(37・40・41・72~74)。壺G) 貼付凸帯とへら描沈線のもの(38)。壺H) 削出凸帯と貼付凸帯のもの(39)。壺I) 2本以上のへら描沈線間に縦沈線を施すもの。壺J) 2本以上のへら描沈線間に刺突文を施すもの(43・75・76)。また円形浮文を貼付けるもの(44)、木ノ葉文を施すもの(71)、削出凸帯に刺突文を施すもの(77)、口縁内面に刻目凸帯を貼付けるもの(69・70)などもある。

甕形土器(47~51・79~81) 甕には胴が張るものが多くなる。口縁部はくの字状に外反するもの、大きく外反し平坦になるもの、口縁部に凸帯を貼付けた三角口縁のものがある。さらに口縁端部に刻目を施すものもある。成形・調整は下層と同様であるが、外面をへら磨きするものは少ない。甕は胴部の施文手法により次のように分類できる。甕A) 無文のもの(48・49)。甕B) へら描沈線のもの(47・79)。甕F) 貼付凸帯のもの(80)。甕G) 2本以上のへら描沈線間に縦沈線を施すもの。甕H) 2本以上のへら描沈線間に山形文を施すもの。甕I) 2本以上のへら描沈線間に刺突文を施すもの(81)。その他に円形浮文を貼付けるもの(50)などもある。

鉢形土器(52~55) 鉢には口縁部が外反するもの(52・53)と三角口縁のもの(54)とがあり無文である。成形・調整は下層と同様である。

蓋形土器(57~59) 蓋には壺用笠形のもの(57・58)と甕用笠形のもの(59)がある。

ミニチュア土器(56・60) 鉢形のもの2点ある。いずれも手づくね成形である。

(2) SD002溝出土の土器

SD002溝は土層の堆積状況が明確ではなく、土器を一括で取上げているが、概して上層ではほとんどが中期のもので、下層には前期のものも含まれていた。ここでは量的に多い中期のものを取上げる事にする。器種には壺・甕・鉢がある。土器はSD001のものに比べると砂粒が少なくなり、色調も明るくなって、灰白色や黄褐色のものが多い。

壺形土器(82~85・91~96) 壺には胴部が球形のものや長胴のものがあり、後者が多い。

口縁端部が下へ拡張したのも見られる。底部は中央部が凹んだものが多い。成形は底部から粘土紐で行なっている。壺は頸部・肩部・胴部の施文手法により次のように分類できる。壺A) 無文のもの(83・84)。壺B) クシ描文様のもの(85)。壺C) 貼付凸帯のもの(91・94)。壺D) 貼付凸帯とクシ描文様の手法のもの(82)。さらに、口縁内面にクシ描文様を施すもの(92)や貼付凸帯をつけるもの(95・96)などもある。また無頸壺(93)も数点ある。

甕形土器(87~90・97) 甕には胴が張るものと張らないもの、口縁部はくの字状に外反するものと三角口縁のものがある。底部には平底と凹底があり、焼成後の穿孔があるものもある。甕は胴部の施文手法により次のように分類できる。甕A) 無文のもの(87・88)。甕B) クシ描文様のもの(89・97)。甕C) 貼付凸帯のもの。甕D) 貼付凸帯とクシ描文様のもの(90)。

鉢形土器(86) 小形の鉢が出土している。

(3) 出土土器の編年について

大宮遺跡SD001の上・下各様式の土器の変遷を壺・甕を指標にして考えてみたい。壺Bのヘラ描沈線は下層のものが2・3条を中心にしてのに対し、上層のものは3・4条を中心としており、多条化の傾向を示している。これは甕Bのヘラ描沈線についても下層では2~4条を、上層では3・4条を中心としており同様の傾向を示している。しかし、壺・甕共に無文のものや少条のものも上層で出土しており、一概に古いとは言えない状況である。段手法を用いた壺Cや甕C・Dは下層では出土しているが、上層では見られない。また、これらの手法を用いた土器は亀山遺跡I a¹⁾式に類似したものが見られる。削出凸帯を用いた壺Dは下層に多く、上層には少ない。甕にも同手法のEがあるが下層で1点出土しており、上層では見られない。貼付凸帯を用いた壺Eは壺Dとは反対に、下層には少なく上層に多く見られる。また甕Fも下層には見られないが上層では出土している。2つの手法を組合わせた壺F・Gでは先の壺D・Eの傾向と同じく、壺Fは下層のみに見られ、壺Gは上層のみに見られる。上・下層の中心をなす削出凸帯と貼付凸帯を合わせた壺Hは下層の方が多。その他の壺や甕ではそれほど大き

第1表 SD001溝出土土器文様表

壺形土器

器種	A	B										C	D					E				F	G	H	I	J
本数		1	2	3	4	5	6	8	10		1	2	3	4	5	1	2	3	4							
下層	6	5	33	33	17	11	1	1	0	4	6	27	35	28	4	28	14	0	0	1	0	4	1	5		
上層	5	1	8	32	38	21	13	1	1	0	1	4	15	2	0	64	47	7	1	0	2	1	1	2		

甕形土器

器種	A	B										C	D	E	F	G	H	I	
本数		1	2	3	4	5	6	7	8	10			3	4	1	2			
下層	27	2	49	105	41	4	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	2	2	1
上層	43	4	21	69	43	20	2	3	2	1	0	0	0	0	3	1	2	1	5

な差は無い。

畿内の弥生時代前期の土器の変遷については田辺昭三・佐原真両氏が成形・文様等から古段階(段の手法をそのまま文様に利用する段階)、中段階(削出凸帯が生じ、少条のへら描沈線を用いる段階)、新段階(貼付凸帯が生じ、多条のへら描沈線を用いる段階)の3段階に分類している¹²⁾。この変遷は若干の地域差はあるものの瀬戸内地方においても基本的には適応できると考えられるが、それぞれは明確に分れるものではなく、かなりの幅をもって変化している。

さて、大宮遺跡SD001上・下層様式の土器群を上記の変遷にあてはめて考えてみるとどうであろうか。壺B・D、甕Bを中心とした下層様式の一括遺物は中階段に比定できると考えられる。しかし、その中でも段の手法を持った壺Cや甕C・Dなどは古い要素を残しており、貼付凸帯を持った壺E・Hなどは新しい要素を持ったものである。上層様式の壺B・E、甕B・Fを中心とした一括遺物は新段階に比定されるものと考えられるが、壺B・甕Bで亀山遺跡I b式のように5条以上にもなる多条のへら描沈線を持ったものは少なく、新段階の中でも比較的古い方に位置づけられよう。またその中でも削出凸帯を持つ壺D・Hなどは古い要素を残している。甕Aで三角口縁のものは中期になると多く見られ、新しい要素を持っている。

またSD002の土器の位置づけも考えてみたい。土器群の中心は壺B・D、甕A・Bであり、無文とクシ描文様の2者が多い。これらの土器は亀山II式に類似しており、中期前半に位置づけられ、SD001上層様式の後に続く事になる。またこの中でも壺の口縁部が下に拡張する82などはかなり新しい要素を持ったものと言えよう。

上記の変遷を基にして周辺の遺跡との関係を見てみたい。今まで広島県東部地域での前期の土器は亀山遺跡での編年を中心としていた。この編年はI a式とI b式に分けられるが、I a式は段の手法を持ち古段階に位置づけられる。I b式は壺が貼付凸帯を中心としており、壺・甕のへら描沈線が多くSD001上層よりもやや新しく位置づけられる。また前期の遺跡では草木遺跡・ザブ遺跡¹³⁾などがあるが、いずれも新段階に比定される。またSD002と同時期と考えられる遺跡には領家遺跡・ザブ遺跡などがある。

第2表 大宮遺跡出土土器編年表

地域 時期	広島県		山口県		岡山県	兵庫県	北四国			
	東 南 部	西 南 部	西 南 部	東 南 部	南 部	西 南 部	中 央 部	東 部		
前 期	古段階	亀山I a	中山I	中ノ浜	岩 田	津 島	吉 田	持 田	室 本	
	中段階	大 宮 SD001 下層		上原II	宮 原 第1溝V層	雄 町 I				
	新段階	大 宮 SD001 上層	亀山I b	中山II	土井浜I	宮 原 第1溝IV層	雄 町 II 舟 山 II	千代田I	阿 方	三 井 五 条 II
中 期	前 葉	大 宮 SD002	亀 山 II	中山III		中ノ郷	南方II	千代田II	土居窪III	五 条 III

さらに瀬戸内地方において、各地域の土器との並行関係を考えてみたい。SD001下層と並行すると考えられる土器には山口県上原Ⅱ類⁽⁵⁾、同宮原第1溝Ⅴ層⁽⁶⁾、岡山県雄町Ⅰ式⁽⁷⁾などがあり、いずれも削出凸帯の手法を特徴としている。SD001上層の木ノ葉文の壺(71)と円形浮文の壺(44)・甕(50)はいずれも他地域から移入された土器と考えられる。木ノ葉文を貝殻で施文する手法はこれまで東限が山口県岩田遺跡といわれており⁽⁸⁾、山口県土井浜Ⅰ式⁽⁹⁾に比定されるものである。また円形浮文の土器は兵庫県千代田遺跡で類似した甕が見られ⁽¹⁰⁾、千代田Ⅰ式に比定される。また壺の口縁内面に凸帯を貼付ける手法は愛媛県阿方式の特徴を備えている。また広島県中山Ⅱ式⁽¹¹⁾、山口県宮原第1溝Ⅳ層、岡山県雄町Ⅱ式は貼付凸帯の手法を特徴としており、SD001上層と並行していると考えられる。SD002と並行すると考えられる土器には岡山県南方Ⅱ式⁽¹²⁾、兵庫県千代田Ⅱ式、愛媛県土居窪Ⅲ式⁽¹³⁾などがあり、いずれもクシ描文の手法を特徴としている。以上を整理して表示すると第2表のようになる。

注

- (1) 潮見浩「広島県亀山遺跡発掘調査報告」『広島大学文学部紀要』21号 1962年
以下、亀山遺跡の土器はこれに従う。
- (2) 田辺昭三・佐原真「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学』Ⅲ 1966年
- (3) 佐道弘之「郷分町草木遺跡調査報告」『福山市文化財年報』5 1964年
- (4) 中田昭「ザブ遺跡—弥生式土器」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会 1973年
- (5) 富士埜勇「上原遺跡」菊川町教育委員会 1976年
- (6) 森江直紹他「宮原遺跡」山口県教育委員会 1974年
- (7) 正岡陸夫「雄町遺跡—弥生式土器」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972年
- (8) 松崎寿和・木下忠「山口県岩田遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年
- (9) 金岡丈夫・坪井清足・金岡恕「山口県土井浜遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年
- (10) 杉原荘介・小林三郎「兵庫県千代田遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年
- (11) 杉原荘介「伊予阿方遺跡・片山遺跡調査概報」『考古学集刊』第2冊 1949年
- (12) 松崎寿和・潮見浩「広島県中山遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年
- (13) 岡山市遺跡調査団「南方遺跡発掘調査概報」1971年
- (14) 岡本健児「愛媛県土居窪遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年
※第2表を作るにあたっては上記の文献の他、次のものを参考にした。
小林行雄・杉原荘介編「弥生式土器集成」本編1 1964年
潮見浩・藤田等「弥生文化の発展と地域性—中国・四国」『日本の考古学』Ⅲ 1966年
岡本健児「弥生土器—四国」『考古学ジャーナル』88—93号 1975年

2. 石器

石鏃、刃器、石包丁、磨製石斧など計約150点が出土した。その約6割はSD001溝上層からで、下層からは約3割、残りがその他の遺構からの出土である。全体として調査区の南半に多く、

特にSD001溝中では南半に集中していた。これらに伴って約1100点の安山岩剥片を採集したが、出土状況は石器とほぼ同様である。

石鏃(101~136) 石鏃はすべて安山岩製で36点がある。うち28点がSD001から出土した。基部の形態から、A) 凹基形(101~127・133)・B) 平基形(128)、C) 凸基形(134~136)に分けられるが、この他に不整形のものや未成品もある(129~132)。数的にはA類が多いがA類はさらに、I) 二等辺三角形をなすもの(101~116)、II) 五角形に近いもの(117~127)に細分でき、これらの出土比率はA I = 50、A II = 35、B = 5、C = 10となり、A I類が半数以上を占め、特徴的なC類は全体の1割に満たないことがわかる。また出土層位との関係では、A II類と不整形のものが上層に多いということがいえる。なお計36点のうち3分の1以上がその一部を破損しており、4点が未成品あるいはそれに近い粗成品であった。これはその多くが溝内から出土しており廃棄されたものであるためなのか、あるいは縄文時代的なものをも含むことから供給が必要においつかず、破損品でも使用せざるをえなかったのか、今後の検討が必要であろう。A I類のうち101は縁辺を鋸歯状に打欠いた鋭利なもので、102は鍬形状に深い抉りをもっている。117・126は粗雑な作りの多いA II類のなかでは丁寧な調整を行なっている。133は重さ3.9gと特に大きく、用途ではC類との関係が考えられる。

石錐(137~143) SD001から安山岩製のもの9点が出土した。形態は、A) 両端に錐部をもち中央をやや膨らませたもの(137・138)と、B) 細い錐部の一端に大きなつまみをつけたもの(139~142)とに分けることができるが、A類は下層からのみ出土した。137の錐部先端は両側とも使用により磨滅しており、140・141は先端が折れている。

石槍(144~146) SD001から安山岩製のもの3点が出土した。144は両端を尖らした長さ7.3cmの小形品で、剥離調整は片面と裏面縁辺のみで他は磨いてある。これは当初磨製石斧状の石器であったものを石槍に作りなおしたため、縁辺ならびに剥離面は再度調整したが、裏面はそのまま使用したため磨研面が残ったものと考えられる。基部約2cmは扁平で表面が白く変色しているが、これは柄の着装痕かもしれない。146は一端を、145は両端を欠損しているが、いずれも両側から剥離調整しており断面は凸レンズ状をなす。

石匙(147~150) 安山岩製の刃器の一端に柄をつくり出したもので、5点がある。柄は身の中央にあるもの(148)と、一方にかたよっているもの(147・149・150)とがあるが、いずれも調整は丁寧で形態もほぼ整っており、全面を剥離調整したものである。

打製石包丁(151・152) 半分を欠損しているが短辺中央を凹ませて紐かけとしたもの2点がSD001上層から出土した。安山岩剥片のほぼ全周を剥離調整している。

刃器(153~171) 安山岩剥片の一辺以上に刃をつけたものすべてをこれに含めた。計40点がある。内容的には、A) 剥片の周囲をさらに剥離調整して方形または隅丸方形の定形化した形態にしたもの(153~159)と、B) 不定形の剥片の1または2辺を剥離調整し刃部としたもの(160~171)に分けることができるが、量的には後者が圧倒的に多い。またB類にも162~164な

どのように大きさ形態ともにある程度選別されたものと、168～171のように単なる剥片を利用したものの2者があり、内容的には丁寧なものから粗雑なものまで種々がある。なおA類はSD001下層に多く、B類は大半が上層から出土した。

磨製石斧(172～176) 計6点がある。172は刃部を欠損するが断面円形に近い小形のもので全面を磨いており、頂部に打痕がみられる。173～175はそれぞれ刃部、頂部、胴部の破片で、いずれも全面を磨いて断面楕円形とし、173と同様に蛤刃をつけたものと考えられる。174の頂部には打痕がある。176は柱状石斧の破片と考えられ、この他に厚さ2.6cmの片刃石斧の断片がある。

磨製石包丁(177～194) 成品23点のほか未成品6点がある(192～194)。大半が黒色の粘板岩製である。形態的には、A) 胴部のやや張る隅丸長方形のもの(177・178・181・182)と、B) 半月形に近いもの(179・180・184)に分けることができ、B類はさらに刃部が直線で背部が外湾するもの(179)と、刃部が外湾するもの(180・184)の2種に細分できる。大半のものに紐かけの円孔がみられるが、その間隔は中心間で1.5～2.7cmまでで、2.0～2.7cm間のものが多い。孔はすべて表裏の両面から開けているが、表裏でやや食違うものもある(183)。紐かけ孔のみられないものについては、打製石包丁のように短辺に紐かけの凹みをつけるものや(181)、短辺を打欠いて紐かけを容易にしたもの(188)があり、小形のものでは背部を平らに磨いて指あてとし刃器状に使用することを意図したもの(190)もある。大半のものに製作時の擦痕がみられるが背部は特に丁寧に磨いており、なかには使用により表面が磨滅したのものもある(178・179・181)。なお、184・185は表面に剝離面が残り打製品のようにみえるが、厚い部分には研磨面が残っており、元来は磨製石包丁だったものが製作後に表面が剝離したのと考えられる。未成品は大形の剥片の縁辺を打欠いて整形するもので、192・193は剝離の途中のもの、194はそれを磨きはじめたものである。194によると、平面をまず磨き、次いで側辺、刃部をつけているようで、背部の研磨、穿孔はその後行なわれるものらしい。

砥石(195～197) 計12点がある。内容的には、A) 地面に置いて使用する大形のもの(195・196)と、B) 手に持って使用できる扁平で小形のもの(197)に分けられ、後者が多い。砂岩、泥岩などを使用しており全体に擦痕がみられる。195は3面を使用しており、196は側面が凹レンズ状に擦り減っている。また197のように小形で扁平なものは大半が両面を使用している。この他一辺20～30cm、厚さ5～10cmの大形の石が2点発見されたが片面は扁平で磨いてあり、作業台あるいは場合によっては砥石として使用された可能性もある。

円礫(198) SD001中から径3～10cm大の円礫が10数点出土した。いずれも花崗岩の河原石で表面に擦痕のみられるものが多く、磨石として用いたものであろう。198は短辺に敲痕が残り、磨くと同時に敲いたこともある、つまり敲石として使用されたことも考えられる。

円盤(199) 赤紫色のチャートを扁平にし周縁を円く擦ったものだが、用途については明らかでない。

紡錘車(200) 黒色の粘板岩剥片を径6cm、厚さ0.5cmの円形に剝離調整し磨いたもので、中

中央に径0.5cmの円孔を両側から穿っている。両面とも製作後剝離しやや薄くなっているが重さ27gを計る。

以上のように今次調査区ではSD001を中心に多数の石器が出土した。このなかでは36点の石鏃と40点の刃器、29点の磨製石包丁の出土がめだつが、前二者は伝統的な縄文時代の影響の強いものであり、石匙や磨製石斧の一部をも含め、縄文時代的色彩がかなり強く残っているといえることができよう。また後者は新しく入ってきた石器で、打製石包丁、柱状石斧、片刃石斧、紡錘車なども新時代のものである。こうしてみると石器の組成には新時代の道具をとり入れながらも旧来の伝統に従ったものが多く使われているということがわかる。ただ石匙の例のように、一般的には縄文時代のものとされながらも西日本ではむしろ弥生時代にみられることが指摘されており、場所によっては縄文時代的な道具の使用が継続して行なわれたのかもしれない。なお、石鏃、石錐、打製石包丁、刃器などはSD001上層と下層とで形態と出土量にやや変化がみられるが、これをただちに時期差に起因するとするには例数が少ないためまだ問題が残ろう。また材質については打製石器は安山岩、磨製石包丁は黒色の粘板岩と石材の選定が行なわれたことがわかるが、原産地についてはまだ明らかでない。

これら石器の他に1~10cm大の安山岩剥片が約1100点出土した。このうちには幅2.0~2.5cm、長さ6~8cmで規則的に打欠いたと思われる縦長の剥片や5cm大の石核もあることからある程度の大きさにした石材をもち込み、遺跡内でそれらを加工したものと考えられる。

3. その他

土製品(201~203) SD001から土製紡錘車、土錘が出土した。

土製紡錘車は3点あるがいずれも当初から土製紡錘車として製作したもので、土器片などの転用品ではない。201は径4.7cm、厚さ中央部で1cmの完形品で、中央よりややずれた位置に径0.5cmの孔を焼成前に穿っている。片面は平らにしているが、他面は中央を膨らませており側縁は平らになでている。重さ27.3g。202は半分を欠損するが径5.6cm、厚さ1.1cmを計り断面は凸レンズ状に近い。中央に径0.7cmの円孔を焼成前に穿っている。203も破損しているがやや大きく、径7.5cm、厚さ1.5cmで断面は長方形に近い。重さは約4分の1を欠損しているにもかかわらず63gを計り、当初は80g以上であったものと考えられる。これは現在知られているものの中では最も大きいグループに属する。

土錘は径約2.5cm、長さ約6cmの管状をなすと考えられるものの破片が1点出土した。

骨製品(204) 204は骨を削り先端を尖らした針状のもので長さ10cm以上、基部は幅1cm以上に広げている。

その他にSD001よりシイ、カシの実が数10点検出され、動物の歯、骨、二枚貝の殻なども少量発見された。またSD002底からはモモの実、径10cm以上もあるカヤの材が検出された。

VI おわりに

大宮遺跡の第1次発掘調査は、北半の街路建設予定地13～15区と、南半のかって多量に土器が発見された27区について実施した。このうち13～15区では、上面が削平されたためか耕作土下にはすぐに基盤の黄灰色粘土層があり、明確な遺構を検出することはできなかった。

27区では、調査区を縦断するように弥生前・中期の溝、それに囲まれて多数の土塊、柱穴などが検出され、それに伴って多量の弥生土器、石器などが発見された。

溝は、調査区を縦断する前期の溝SD001と、その外側約10mを巡ると考えられる中期の溝SD002の2条がある。SD001は長さ30m以上を調査したが、内部に陸橋状の施設SX030をもち、ある時期には溝底のかさ上げを行なっていることを明らかにした。SD002はその一部しか調査できなかったが、より規模の大きいものであったことが予想される。両者共、北西方向に中心をもつ弧状をなし、延長すると径80～100m程度の環濠状になることが推定され、時期的に新しくなると共に外側へ拡大していったことが考えられる。ただ環濠の内側については、土塊、柱穴を検出したにすぎず、調査区の関係と旧地表面の削平によってその性格を具体化することはできなかった。

またSD001内にみられた焼土や灰・炭の広がりについては、周辺で土器の焼成が行なわれたことを推測させたが、その作業が溝内で行なわれたか否かについては明らかにできなかった。こういった遺構については他に調査例もなく、結論は今後の調査に待ちたい。

遺物については、SD001・002から多量の弥生土器が一括して出土し、この地域における土器型式編年の基準となった。その編年の位置づけについてはV章1で記したとおりである。ただ土器の溝内廃棄の意味、器種構成の検討、多量の底部穿孔土器などについてはここではふれえなかった。石器も多量に発見されたが、在来の道具と移入の道具が混在使用されており、道具による石材の使い分け、あるいは遺跡内での石器製作も推測された。さらに溝底からのモモ、シイ、カシなどの食用木の実、あるいは獣骨、貝殻などの発見は食料生産の方法に多様性があったことをうかがわせている。

近年県内では、大規模開発に伴って弥生時代集落の調査例が急増している。それによると中期後半から後期にかけての集落は谷水田を見下ろす低丘陵上に立地し、時期が下ると共に小規模に分散していく傾向がみられる。ところがそれ以前の集落については調査例がなく、こういった集落形態をとるのか明らかでなかった。今回の調査は前期から中期前半にかけての集落遺跡の例として、平地に立地し、かなり大規模な環濠をもつものがあるということを立証したことで大きな意義があるといえよう。

以上のように大宮遺跡の第1次発掘調査は周辺地域における弥生時代の社会、生活を考える上で予想以上の成果をあげて終了した。県下で例のない大規模で貴重な遺跡であるだけに今後は調査体制を確立し、より綿密な計画のもとに調査研究を進めてゆかなければならない。

付1 土器観察表

SD001下層

器形	土器番号	形態・成形手法・文様の特徴
壺 A	11	肩が張らず長胴で平底。外面縦へら磨き、内面底部はナデ。
壺 B	2・4	口縁部は外反し、端部は2は丸く、4は角ばる。外面、内面、口頸部は横ナデ。内面以下ナデ。2は4本、4は2本のへら描沈線を頸部に施す。
	1	口縁部は外反し、端部は丸い。肩が少し張り平底。外面横へら磨き、胴下半は縦へら磨き。内面口頸部のみ横ナデ、以下ナデ。底部ナデ。頸部にへら描沈線2本を施す。
	3	口縁部は外反し、端部は角ばる。口頸部は内外面共に横へら磨き、肩部外面は横ハケ、内面ナデ。頸部に3本、胴部に3本のへら描沈線を施す。
壺 C	8	頸部は立上がり、口縁部が大きく外反し、端部は丸い。外面は横へら磨き、内面不明、頸部に段を作り、下にへら描沈線2本を施す。
	9	肩が張り出し、扁平な胴部で、底部は上げ底。粘土円板成形。胴部内外面共に横へら磨き。底部は荒いへら磨き。肩部に段を作り、下にへら描沈線を2本施す。
壺 D	5	口縁部は少し外反し、端部は角ばる。外面は横へら磨き、内面、口頸部は横ナデ、以下ナデ。頸部に削出凸帯3本を付ける。
	6	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。外面は縦へら磨き、内面口頸部は横へら磨き、以下ナデ。頸部に削出凸帯2本を付ける。
	7・64	口縁部は外反し、端部は丸い。外面は横へら磨き、内面は横ハケ後横へら磨き、頸部に削出凸帯5本を付ける。
	63	内外面共に横へら磨き。頸部に削出凸帯2本を付け、上に斜方向の沈線を施す。
	65	外面は横へら磨き、内面は不明。肩部に削出凸帯7本を付ける。
壺 E	15	口縁部は外反し、端部は角ばる。外面・口縁部内面は横へら磨き、内面以下ナデ。頸部に台形の凸帯を貼付ける。
壺 F	13	口縁部は外反し、端部は丸い。胴部は扁平で平底。内外面共に横へら磨き。内面は外面に比べると荒い。底部はナデ。頸部に2本・肩部に3本の削出凸帯を付け、胴部にへら描沈線3本を施す。
壺 H	12	肩部が張り、胴部は扁平である。外面・内面上半は横へら磨き、下半は横ハケ目後荒いへら磨き。肩部に削出凸帯4本を付け、胴部に三角形の凸帯を貼付け刻目を施す。
	18	口縁部は外反し、端部は丸い。長胴で平底である。外面・口縁部内面は横へら磨き、内面・底部はナデ。頸部に三角形の凸帯を貼付け刻目を施し、胴部に削出凸帯2本を付ける。
壺 I	14	口縁部は外反し、端部は角ばる。外面は横へら磨き。内面は口頸部のみ横ナデ、以下ナデ。頸部にらせん状にへら描沈線を施し、間に縦沈線5、6本を6ヶ所に施す。
壺 J	66	内外面共に横へら磨き。頸部にへら描沈線を2本施し、間に刺突文を施す。
壺 (その他)	10	平底で中央に焼成後の穿孔がある。外面は横へら磨き、内面はナデ。
	16	口縁部は大きく外反し、端部は角ばりへら描沈線を1本施す。内外面共に横へら磨き。口縁部に焼成前の穿孔がある。
	62	口縁部は外反し、端部は角ばる。内外面共に横へら磨き。頸部にへら描沈線1本を施し、上に刺突文を施す。
	61	口縁部は外反し、端部は角ばる。外面は横へら磨き、内面不明。口縁部内面にへら描沈線を1本施す。

器形	主番 器号	形態・成形手法・文様の特徴
無頸壺	17	口縁端部は平坦になり外に拡張。口縁部内外面共に横ナデ。肩部外面は横へら磨き、内面ナデ。口縁端部に刻目を施し、肩部にへら描線6本を施す。
甗 A	28	口縁部は外反し、端部は丸い。胴部は張らず、平底である。口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は縦ハケ目、内面は縦へら磨き。底部はナデ。口縁端部に刻目を施す。
甗 B	20	口縁部は外反し、端部は角ばる。口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は横ハケ目、内面は不明。口縁端部に刻目を施し、胴部にへら描沈線3本を施す。
	22	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。内外面共に横へら磨き。胴部にへら描沈線2本を施す。
	23	口縁部は少し外反し、端部は丸い。胴部は張り出す。口縁部内外面共に横ナデ。胴部内外面共に縦ハケ目、後外面はナデ。口縁端部に刻目を施し、胴部にへら描沈線4本を施す。
甗 C	21	口縁部は外反し、端部は少し角ばる。胴部は少し張り出す。口縁部内外面共に横ナデ。胴部内外面共に横へら磨き。胴部を削り段を作る。
甗 D	24	口縁部は外反し、端部は少し角ばる。口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は横ハケ目、内面横へら磨き。口縁端部に刻目を施し、胴部を削り段を作り、上にへら描沈線3本を施す。
甗 E	25	口縁部は大きく外反し、平坦になり、端部は角ばる。口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は縦ハケ目、内面はナデ。口縁端部に刻目を施し、胴部に削出凸帯4本を付ける。
甗 G	26・67	口縁部は外反し、端部は丸い。口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面はナデ、内面は不明。口縁部外面に刻目を施し、26は胴部にへら描沈線を2本、67は4本施し、間に縦沈線を施す。
甗 H	27	口縁部は外反し、端部は丸い。胴部が張り出す。口縁部内外面共に横ナデ、以下不明。口縁端部に刻目を施し、胴部にへら描沈線3本を施し、間に山形の平行沈線を施す。
甗 I	68	口縁部は大きく外反し、平端になり端部は角ばる。口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は縦ハケ目、内面は横へら磨き。口縁端部に刻目を施し、胴部にへら描沈線3本を施し、間に刺突文を施す。
甗	19	平底で中央に焼成後の穿孔がある。粘土円板成形。外面は縦ハケ目、下端は指押え、内面は横へら磨き。底部はナデ。
鉢	29・30	口縁部は外反し、端部は29は丸くなり30は角ばる。平底。口縁部内外面横ナデ。胴部は内外面縦ハケ目後横へら磨き。底部はナデ。
壺用蓋	31	円盤形でつまみが付き、端部は角ばる。中央に孔がある。調整不明。
	32~34	笠形で32・33はつまみが付き、34は無し。中央に孔がある。32は外面ナデ、内面へら磨き。33は外面へら磨き、内面ナデ。34は外面ハケ目内面ナデ。32は外面周辺部にへら描沈線2本を施す。
甗用蓋	35	笠形でつまみが付き、端部は丸い。内面・外面下半は横へら磨き。上半つまみ部はナデ。

SD001上層

壺 B	36	口縁部は外反し、端部は丸い。長胴であり、平底。外面・内面口頸部は横へら磨き。内面と底部はナデ。頸部にへら描沈線2本を施す。
	42	口縁部は外反し、胴部は丸い、調整不明。頸部・胴部にへら描沈線をらせん状に6回周す。
	45	口縁部は外反し、端部は角ばる。調整不明。頸部にへら描沈線5本を施す。
壺 E	37	口縁部は外反し、端部は角ばる。内外面横へら磨き。頸部に三角形の凸帯を2本貼付け刻目を施す。
	40・41	胴部は丸く、平底である。胴部外面は横へら磨き、内面はナデ。41は調整不明。頸部・胴部に三角形と台形の凸帯を貼付け刻目を施す。

器形	土器号	形態・成形手法・文様の特徴
壺 E	72~74	72は内外面横へら磨き。他調整不明。72は2本、74は4本、73は台形の幅広い凸帯を貼付ける。73は凸帯に沈線を2本施し刻目を施す。74も刻目を施す。
壺 G	38	胴部は丸く、底部は凹む。外面は横へら磨き。内面・底部はナデ。胴部に凸帯を貼付け、その上にへら描沈線6本を施す。
壺 H	39	口縁部は外反し、端部は丸い。胴部は丸い。調整不明。頸部に三角形の凸帯を貼付け、胴部に削出凸帯4本を付ける。
壺 J	43	口縁部は外反し、端部は丸い。長胴で平底。調整不明。頸部にへら描沈線2本を施し、間に刺突文を施す。
	75・76	75は内外面横へら磨き。頸部にへら描沈線2本を施し、間に刺突文を施す。76は竹管による刺突である。
壺 (その他)	44	頸部が長く、口縁部は外反し、端部は丸い。長胴である。口縁部内外面横ナデ。胴部外面は横へら磨き、内面はナデ。頸部と胴部にへら描沈線2・3本を施し、間に円形浮文を貼付ける。
	46	口縁部は大きく外反し、端部は角ばり、へら描沈線を施す。内外面横へら磨き。
	69・70	内面に三角形の凸帯を貼付け、刻目を施す。内外面横へら磨き。
	71	胴部は丸い。外面は横ナデ、内面は不明。胴に台形の凸帯を貼付け、貝殻沈線を施す。肩部には貝殻沈線2本を施し、凸帯との間には貝殻木ノ葉文を施す。
	77	内面は横ハケ目、外面不明。肩部に幅広い凸帯を削出し、へら描沈線を施し、間に刺突文を施す。
78	外面は横へら磨き、内面はナデ。肩部にへら描沈線3本を施し、その下にへらによる斜交子文を施す。	
甗 A	48	口縁部は大きく外反し、端部は角ばる。口縁内外面横ナデ。胴部外面は縦ハケ目、内面は横ハケ目。
	49	口縁部外面に三角形の凸帯を貼付け口縁部とする。外面は縦ハケ目、内面は横へら磨き。
甗 B	47	口縁部は少し外反し、端部は丸い。口縁部内外面横ナデ。胴部外面は縦ハケ目、内面は縦ハケ目後横へら磨き。口縁部に刻目を施し、胴部にへら描沈線3本を施す。
	79	口縁部は大きく外反し、平坦となり端部は角ばる。口縁部内外面横ナデ。胴部外面はナデ。内面は横ハケ目。口縁部に刻目を施し、胴部にへら描沈線10本を施す。
甗 F	80	口縁部は少し外反し、端部は丸い。口縁部内外面横ナデ。胴部内外面横へら磨き。口縁部に刻目を施し、胴部に三角形の凸帯を貼付け刻目を施す。
甗 I	81	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。調整不明。口縁部に刻目を施し、胴部にへら描沈線2本を施し、間に刺突文を施す。
甗 (その他)	50	口縁部と胴部に三角形の凸帯を貼付け、口縁とする。口縁部内外面横ナデ。胴部外面は縦ハケ目、内面はナデ。口縁端部と凸帯に刻目を施し、その下にへら描沈線10本を施し、その下に円形浮文を貼付ける。
	51	平底で中央部に焼成後の穿孔がある。外面は縦へら磨き。内面・底部不明。粘土平板成形。
鉢	52	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。平底。口縁部外面は横ナデ、以下と内面共に横へら磨き。底部内外面ナデ。
	53	口縁部は外反し、端部は角ばる。口縁部内面は横ナデ、以下と外面共に横へら磨き。
	54	口縁部外面に三角形の凸帯を貼付け口縁とする。胴部中位に把手を貼付ける。内面は横へら磨き、外面は不明。

器形	土器号	形態・成形手法・文様の特徴
鉢	55	口縁部は少し外反し、角ばる。胴部は張り出す。口縁部内外面横ナデ。胴部外面は縦ハケ目後横へら磨き、内面は横ハケ目後横へら磨き。
壺用蓋	57・58	笠形で57はつまみがなく、58はある。中央部に孔がある。内外面横へら磨き。
甗用蓋	59	笠形でつまみがあり、端部は角ばる。調整不明。
ミニチュア土器	56・60	鉢のミニチュアで口縁端部は丸く平底。60は内外面横へら磨き、底部はナデ。56は調整不明。

SD002

壺 A	83	口縁部は少し外反し、長胴である。口縁部内外面横ナデ。頸部外面横へら磨き、胴部内外面は縦へら磨き。
	84	口縁部は外反し、端部は角ばる。口頸部内面は横へら磨き。以下と外面共に横ナデ。
壺 B	85	口縁部は少し外反し、長胴である。口頸部外面は横ナデ、内面は横へら磨き。胴部外面は縦へら磨き、内面はナデ。頸部に4段のクシ描直線文とその下に刺突文を施す。
壺 C	91	口縁部は外反し、端部は内側へ拡張する。内外面横ナデ。外面に三角形の凸帯を2本貼付け刻目を施す。
	94	粘土紐を貼付け2本の凸帯とし、上には刻目を施す。調整不明。
壺 D	82	口縁部は外反し、端部は下方へ拡張する。胴部は張り出す。頸部外面は縦ハケ目、胴部外面・内面横へら磨き。口縁部にへらで斜交子文を施す。頸部に三角形の凸帯を貼付け刻目を施し、その下にクシ描直線文と刺突文を2段施す。
壺	92	口縁部は大きく外反し、端部は角ばる。内面にクシ描直線文を施し、その下と口縁端部に刺突文を施す。
	95・96	内面に三角形の凸帯を貼付ける。95は刻目を施す。調整不明。
無頸壺	93	胴部は張り、口縁端部は角ばる。口縁部に孔がある。外面は横ハケ目、内面は横へら磨き。クシ描直線の下に波状文をつけ、4段に施している。
甗 A	87	口縁外面に三角形の凸帯を貼付け口縁部とする。口縁部内外面横ナデ、胴部外面は縦ハケ目、内面はナデ。
	88	口縁部は大きく外反し、端部は丸い。口縁部内外面横ナデ。胴部内面は横へら磨き、外面不明。
甗 B	89	口縁外面に三角形の凸帯を貼付け口縁部とする。口縁部外面は横ナデ。胴部外面は縦ハケ目、内面は横へら磨き。胴部にクシ描直線文を施し、下に刺突文を施す。
	97	口縁外面に三角形の凸帯を貼付け口縁部とする。口縁部外面は横ナデ。胴部内面は横へら磨き。胴部にクシ描直線文とクシ描波状文を施す。
甗 D	90	口縁外面とその下に三角形の凸帯を貼付け口縁部とする。口縁部外面は横ナデ。胴部外面は縦へら磨き、内面は横へら磨き。胴部にクシ描直線文とクシによる刺突文を2段施す。
鉢	86	口縁部は角ばる。外面は縦ハケ目後横へら磨き、内面はナデ。口縁端部に刻目を施す。

SK013

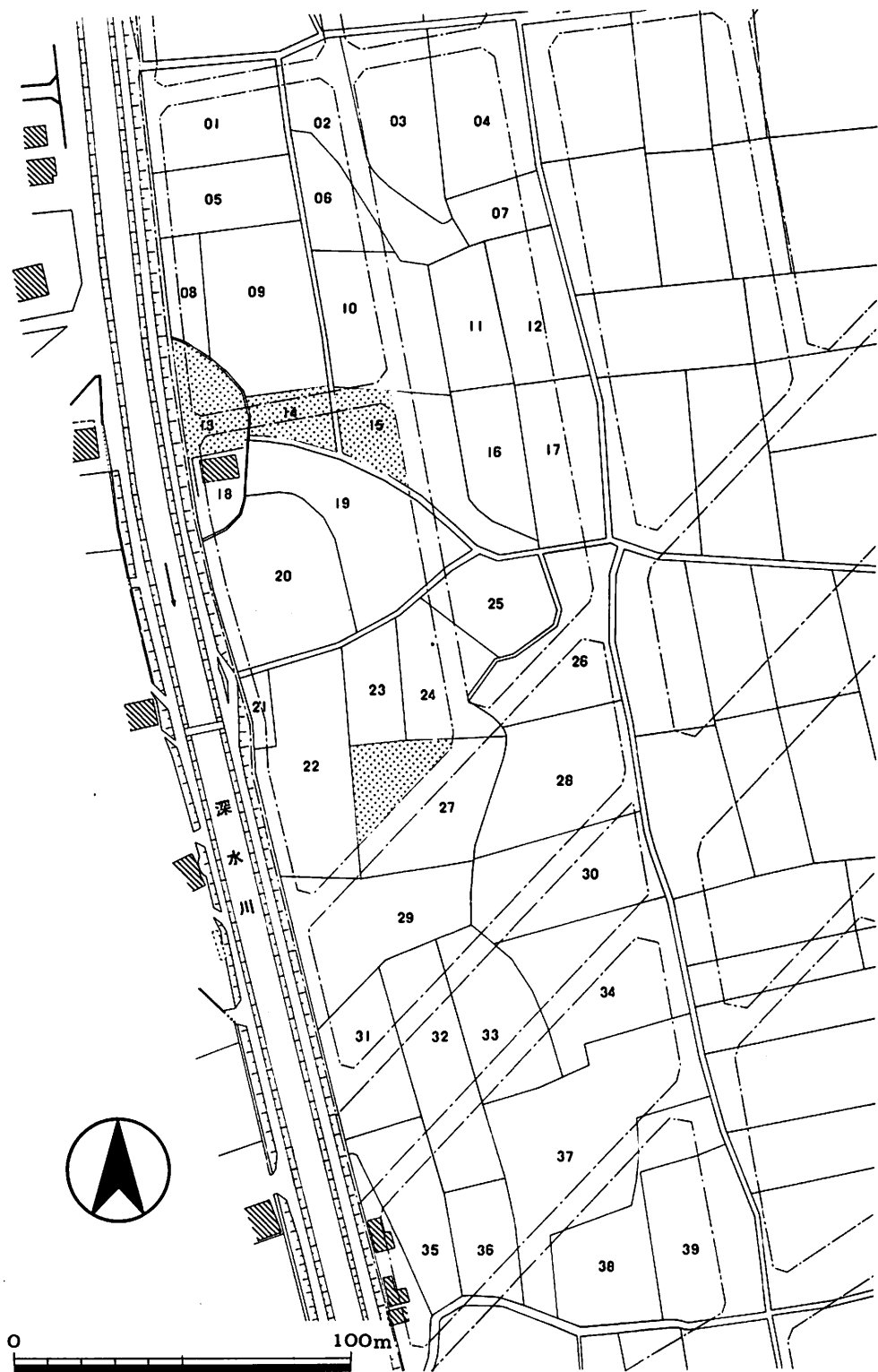
甗 A	98	口縁部は大きく外反し、長胴であり、平底。口縁部内外面横ナデ。胴部外面は縦へら磨き、内面・底部はナデ。口縁部に2孔を1対あける。
蓋	99	笠形でつまみがあり、端部は丸い。調整不明。口縁部に2孔を1対あける。

付2. 石器計測表

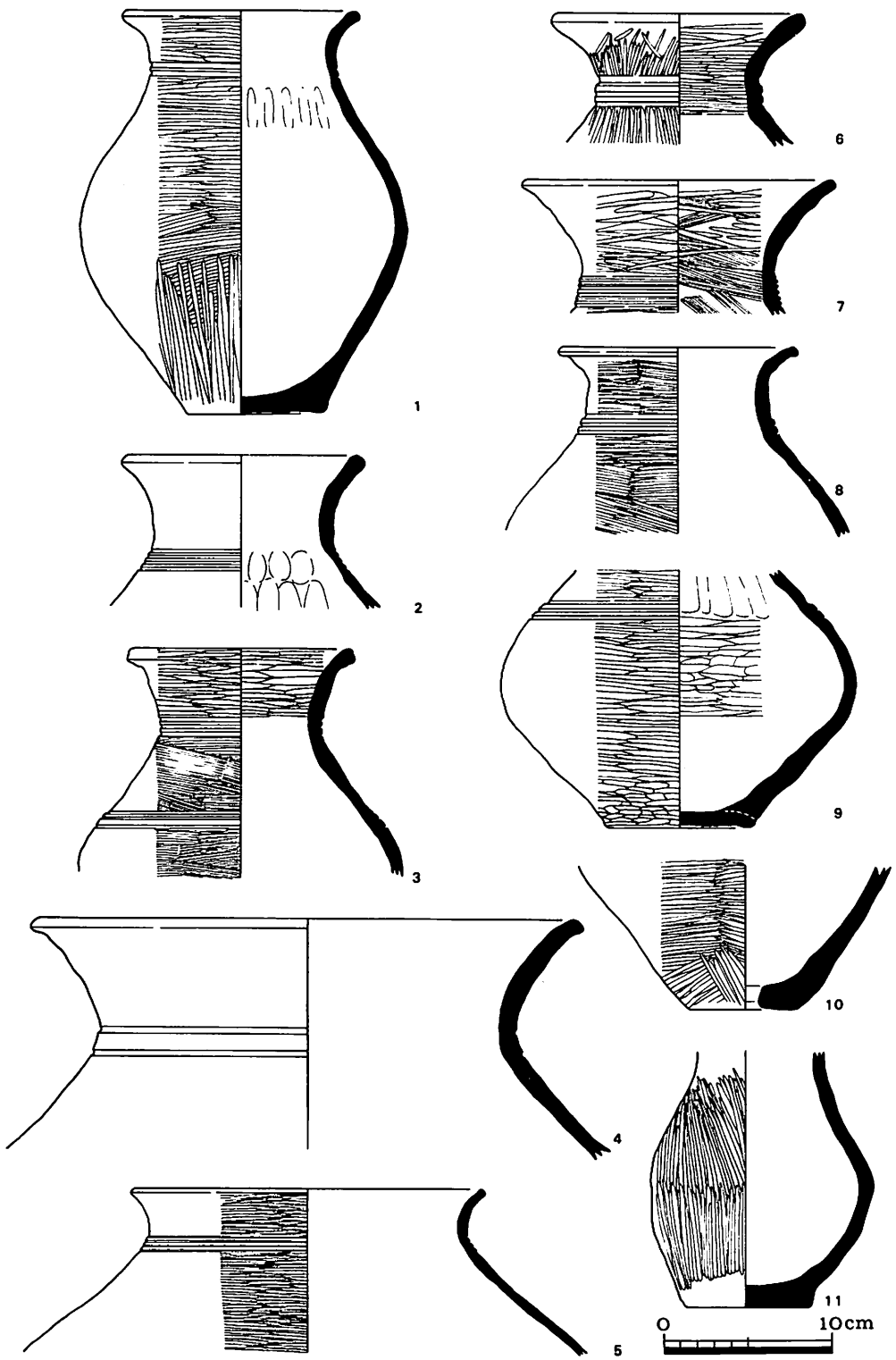
番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	出土地
101	石 鏃	2.8	1.6	0.8	安山岩	SD001下層
102	"	2.3	1.4	0.9	"	SD001上層
103	"	2.3	1.7	0.8	"	"
104	"	2.3	1.4	0.6	"	SD001下層
105	"	2.0	1.3	0.7	"	SD001上層
106	"	2.0	1.5	0.7	"	"
107	"	2.7 (1.4)	(0.8)	"	"	SD001下層
108	"	2.6	1.4	1.2	"	表 土
109	"	(1.7)	1.4 (0.7)	"	"	SD001下層
110	"	(1.4)	1.5 (0.5)	"	"	SD001上層
111	"	2.3 (1.4)	(0.9)	"	"	"
112	"	(1.8)	(1.4) (0.4)	"	"	SD001下層
113	"	1.9 (1.5)	(0.6)	"	"	SD001上層
114	"	(2.2)	(1.6) (0.7)	"	"	"
115	"	2.6	1.8	1.3	"	SK020
116	"	(2.3)	1.8 (1.4)	"	"	表 土
117	"	2.2	1.4	0.8	"	"
118	"	1.9	1.3	0.5	"	SD001上層
119	"	(1.9)	1.7 (0.6)	"	"	"
120	"	1.7	1.4	0.5	"	SD001下層
121	"	2.1	1.5	0.7	"	SD001上層
122	"	1.8 (1.3)	(0.5)	"	"	SX032
123	"	1.7	1.3	0.4	"	SD001上層
124	"	(1.8)	1.6 (0.5)	"	"	"
125	"	1.8	1.1	0.5	"	"
126	"	2.3	1.3	0.6	"	"
127	"	(1.7)	(1.3) (0.5)	"	"	"
128	"	(1.3)	1.4 (0.4)	"	"	SK020
129	"	2.4	1.9	2.4	"	SD001上層
130	"	1.9	1.6	1.1	"	"
131	"	2.1	1.5	1.0	"	"
132	"	2.5	1.3	1.2	"	表 土
133	"	3.4	2.6	3.9	"	SD001下層
134	"	4.1	1.5	3.6	"	SD001上層
135	"	(2.4)	1.5 (2.0)	"	"	SD001下層
136	"	(2.3)	1.6 (1.7)	"	"	"
137	石 鏃	4.7	1.5	3.6	"	"
138	"	4.6	1.2	3.3	"	"
139	"	5.2	1.5	5.0	"	SD001上層
140	"	(3.1)	1.5 (1.8)	"	"	"
141	"	(3.4)	1.7 (2.9)	"	"	"
142	"	3.0	1.6	2.4	"	"
143	"	(2.1)	0.8 (0.7)	"	"	"
144	石 槍	7.3	1.9	11.7	"	"
145	"	(6.3)	3.8 (31.1)	"	"	SD001下層
146	"	(4.0)	2.8 (10.2)	"	"	SD001上層
147	石 匙	6.3	4.7	15.1	"	"
148	"	(6.0)	4.8 (19.4)	"	"	SD001下層
149	"	6.5	4.7	16.9	"	"
150	"	(3.2)	3.5 (6.0)	"	"	SD001上層
151	打製石包丁	(3.2)	5.1 (13.6)	"	"	"
152	"	(2.7)	4.5 (10.7)	"	"	"
153	刃 器	5.8	5.2	34.9	"	"

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	出土地
154	刃 器	6.7	3.9	26.2	安山岩	SD001下層
155	"	6.8	4.7	30.6	"	11区柱穴
156	"	5.3	3.8	15.0	"	SD001下層
157	"	3.4	2.7	5.3	"	SD001上層
158	"	(3.9)	(2.9) (11.8)	"	"	"
159	"	(3.6)	4.4 (14.8)	"	"	SD001下層
160	"	5.4	4.5	13.3	"	SD001上層
161	"	(4.8)	3.2 (11.5)	"	"	"
162	"	6.8	3.5	19.0	"	"
163	"	6.5	3.5	13.4	"	"
164	"	5.2	2.6	6.9	"	"
165	"	5.7	3.8	19.0	"	"
166	"	3.8	4.2	12.0	"	"
167	"	4.8	3.6	14.4	"	"
168	"	3.7	1.9	4.8	"	表 土
169	"	5.5	5.3	22.4	"	SD001下層
170	"	4.7 (2.4)	(8.2)	"	"	表 土
171	"	5.0	2.7	5.0	"	SD001上層
172	磨製石斧	(9.1)	4.3 (199.4)	斑れい岩	"	"
173	"	(7.3)	(4.0) (130.4)	安山岩	"	SD001下層
174	"	(4.4)	4.9 (106.7)	石英斑岩	"	"
175	"	4.1 (6.0)	(136.9)	安山岩	"	SD001上層
176	"	(5.3)	(1.9) (17.8)	緑色片岩	"	表 土
177	磨製石包丁	12.6	3.8	42.1	粘板岩	SD001下層
178	"	9.7	4.6	42.4	"	"
179	"	(9.1)	4.6 (57.9)	"	"	SD001上層
180	"	11.7	5.2	76.7	"	"
181	"	8.2	5.1	57.9	"	SD001下層
182	"	(9.5)	4.6 (30.6)	"	"	SD001上層
183	"	(3.1)	(3.2) (8.8)	"	"	"
184	"	(7.1)	7.0 (74.9)	緑色片岩	"	"
185	"	(5.2)	5.5 (21.9)	粘板岩	"	"
186	"	(5.8)	4.8 (23.4)	"	"	SD001下層
187	"	(7.8)	(4.0) (28.2)	"	"	SD001上層
188	"	8.0 (3.3)	(41.0)	"	"	SD001下層
189	"	(3.9)	3.7 (13.4)	"	"	SD001上層
190	"	7.8	3.5	20.7	"	"
191	"	(2.1)	4.0 (5.6)	"	"	"
192	"	10.0	4.4	45.1	"	"
193	"	14.0	5.9	113.2	"	SD001下層
194	"	(7.1)	4.9 (25.6)	"	"	"
195	砥 石	24.7	9.2	3,000	砂 岩	SD001上層
196	"	(10.0)	(9.4) (610.0)	"	"	SD001下層
197	"	(11.2)	(5.1) (126.0)	泥 岩	"	SD002下層
198	円 礫	10.9	7.5	625.0	花崗岩	SD001上層
199	円 盤	5.2	4.1	24.5	チート	SD001下層
200	紡 織 車	5.8	5.9	(27.0)	粘板岩	"

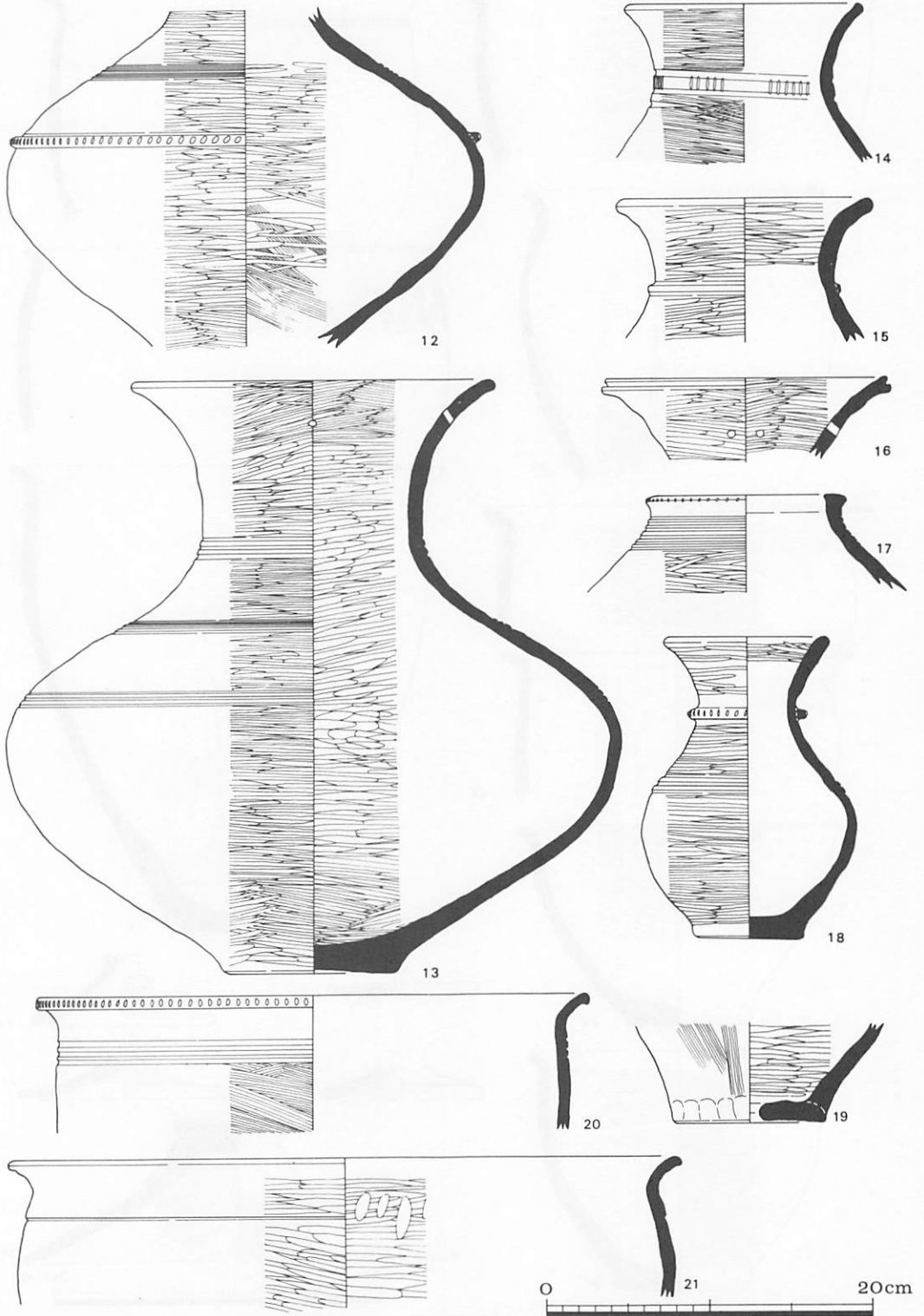
※()は現存値



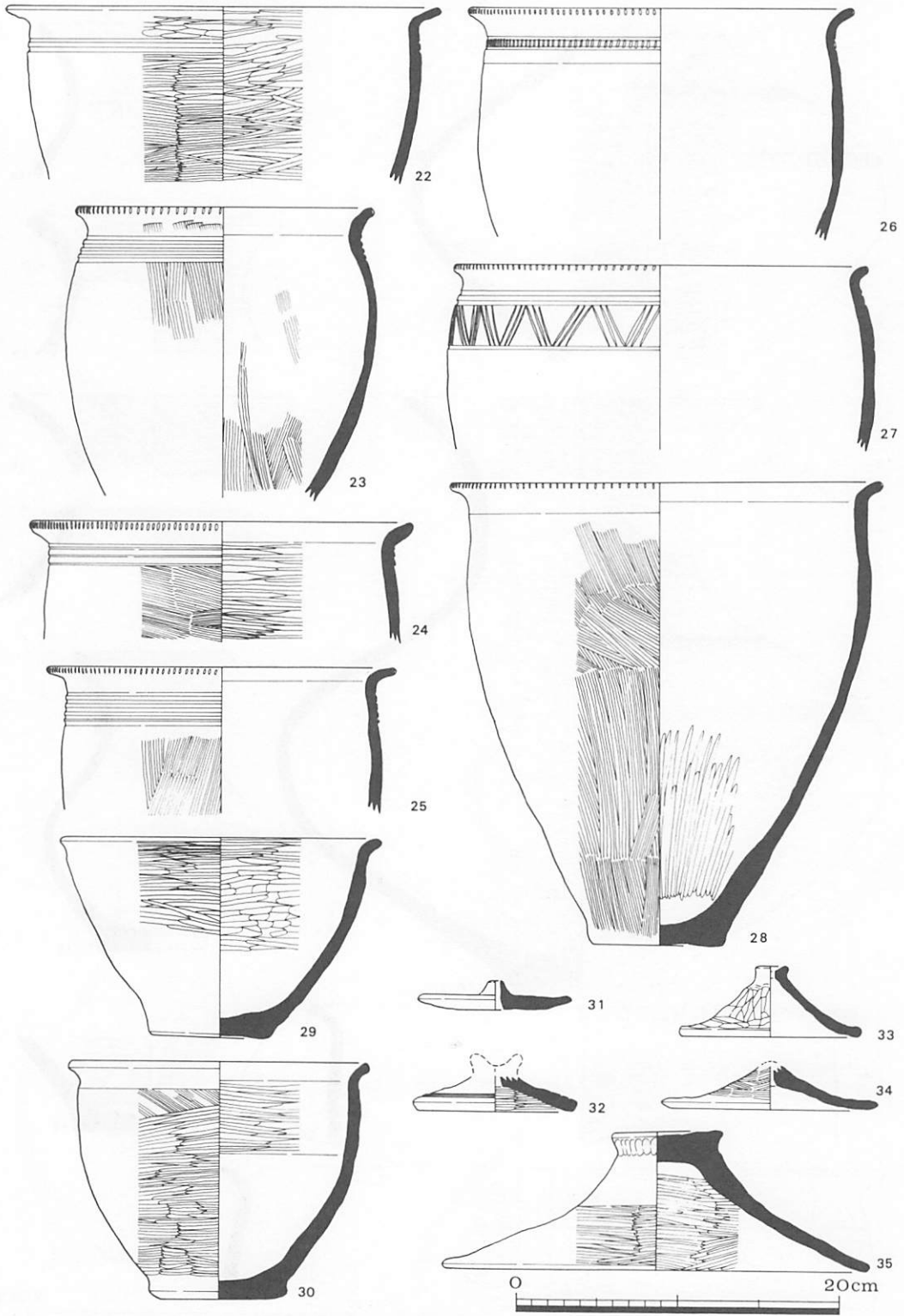
第2図 大宮遺跡地区割図 (数字は地区番号, アミ目は本年度調査区)



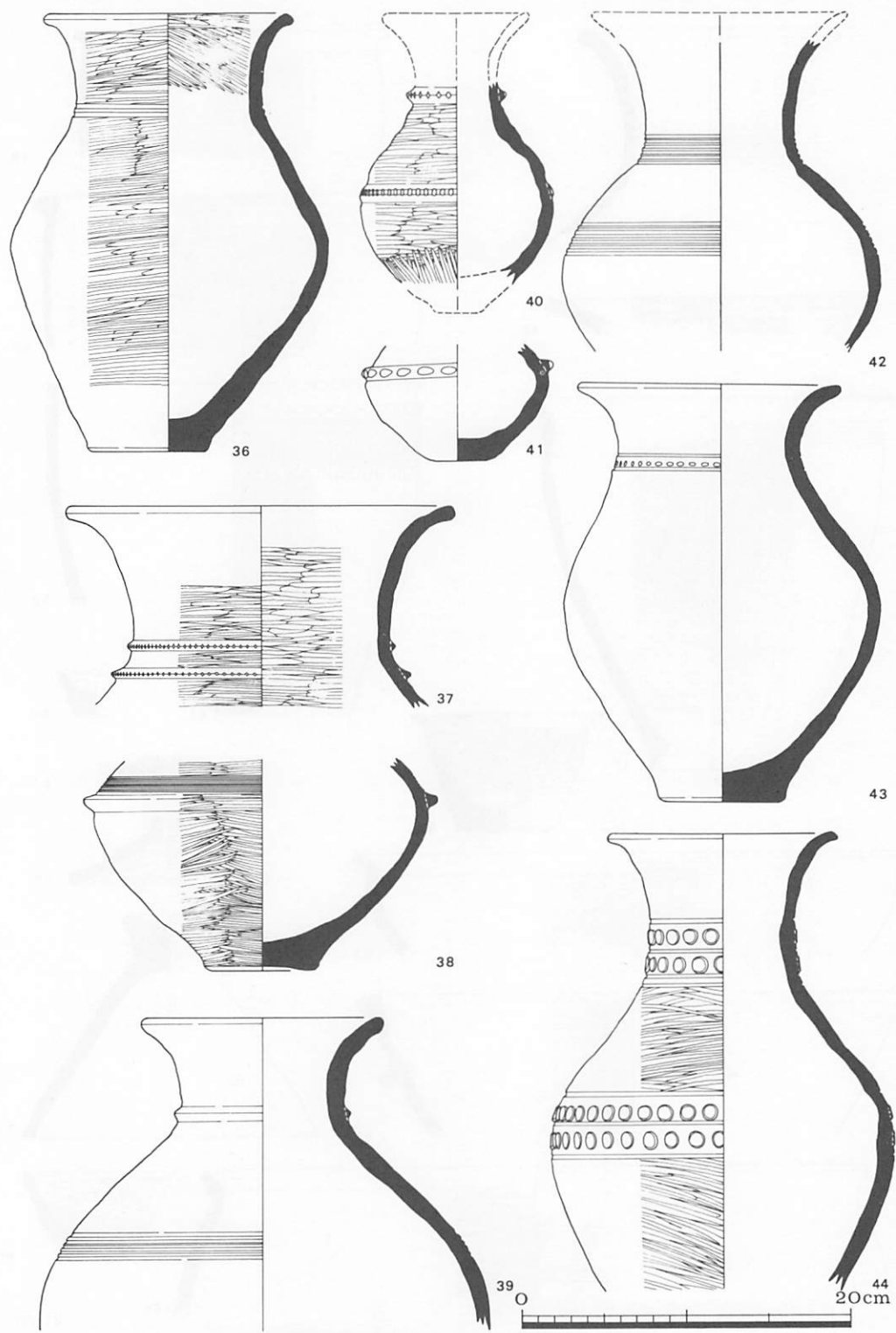
第5図 土器実測図 I SD001下層(5は $\frac{1}{8}$)



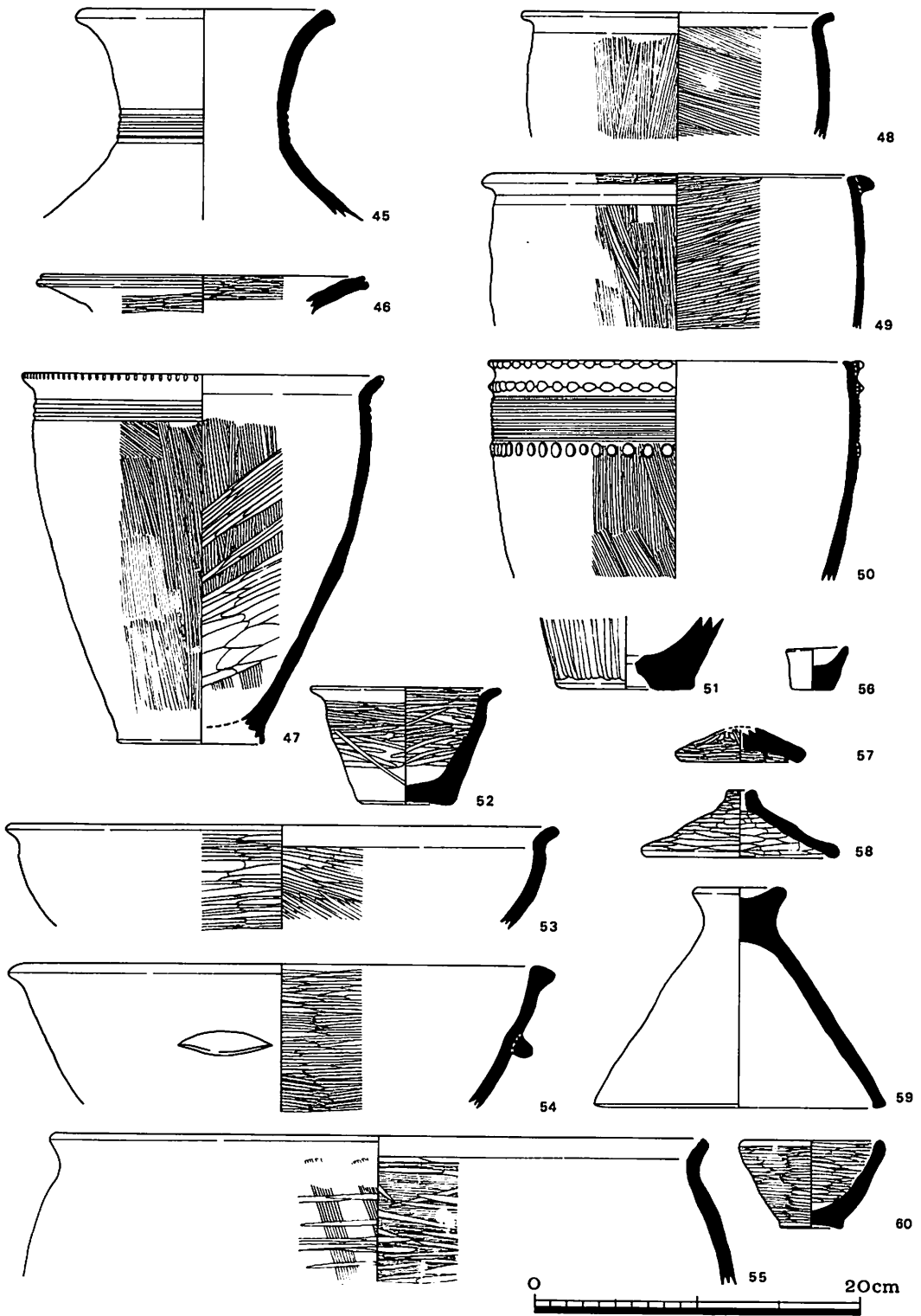
第6図 土器実測図II SD001下層



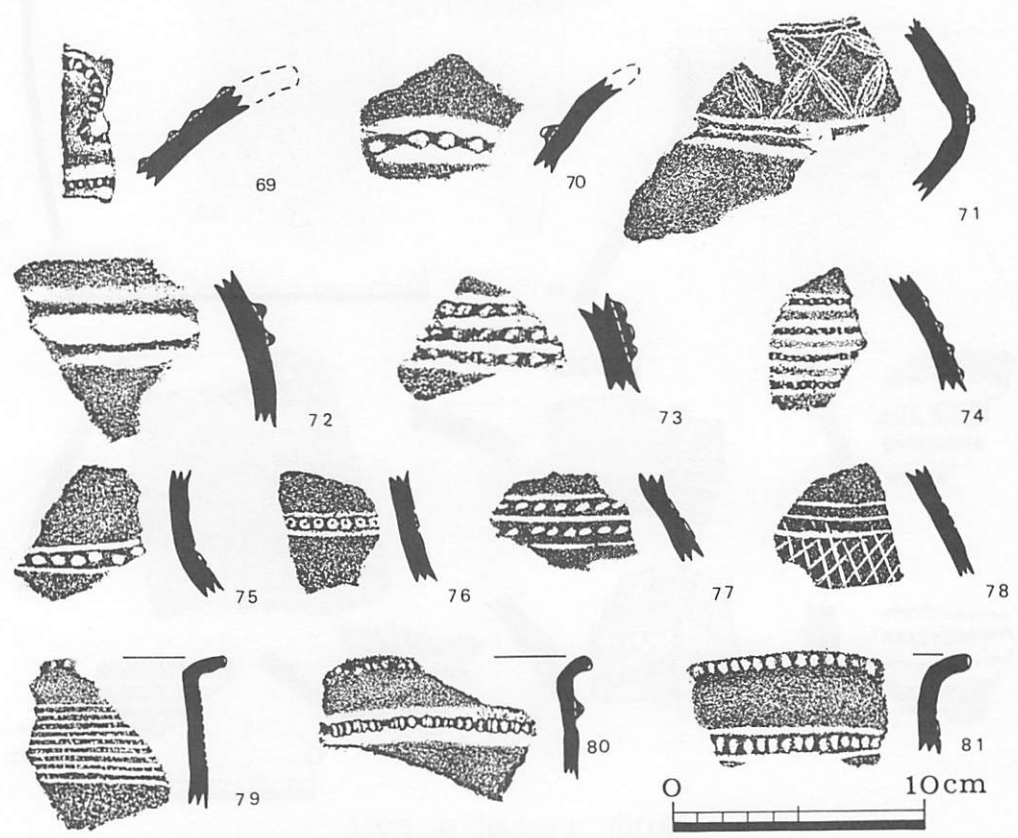
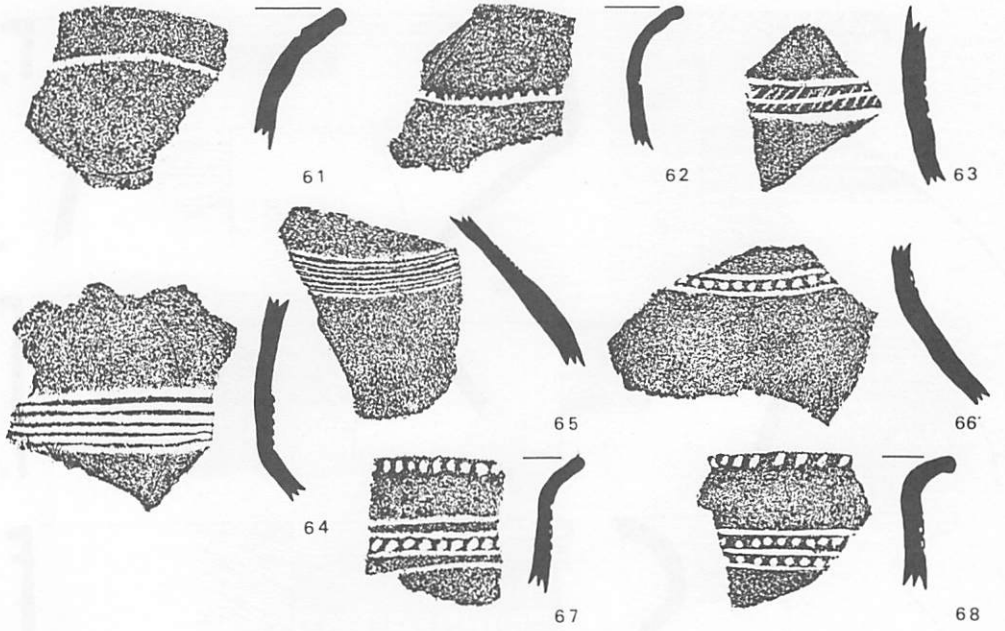
第7图 土器实测图Ⅲ SD001下層



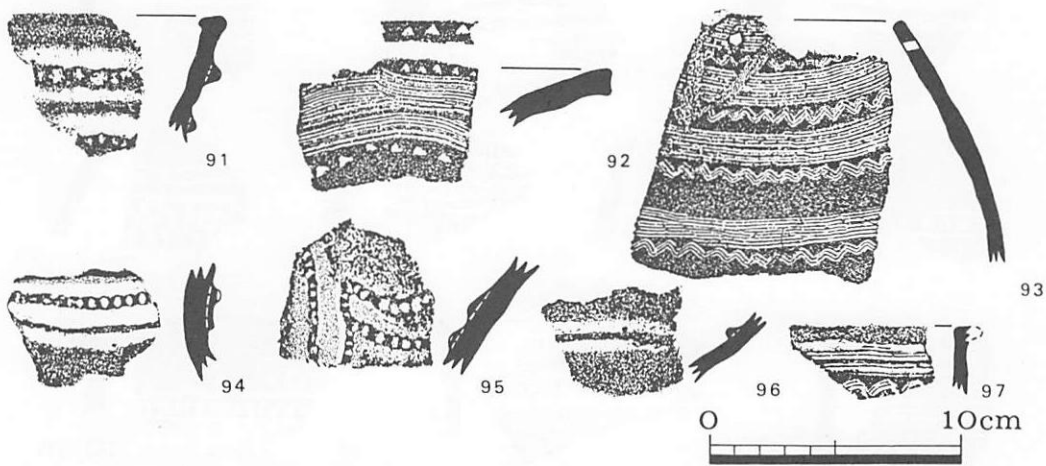
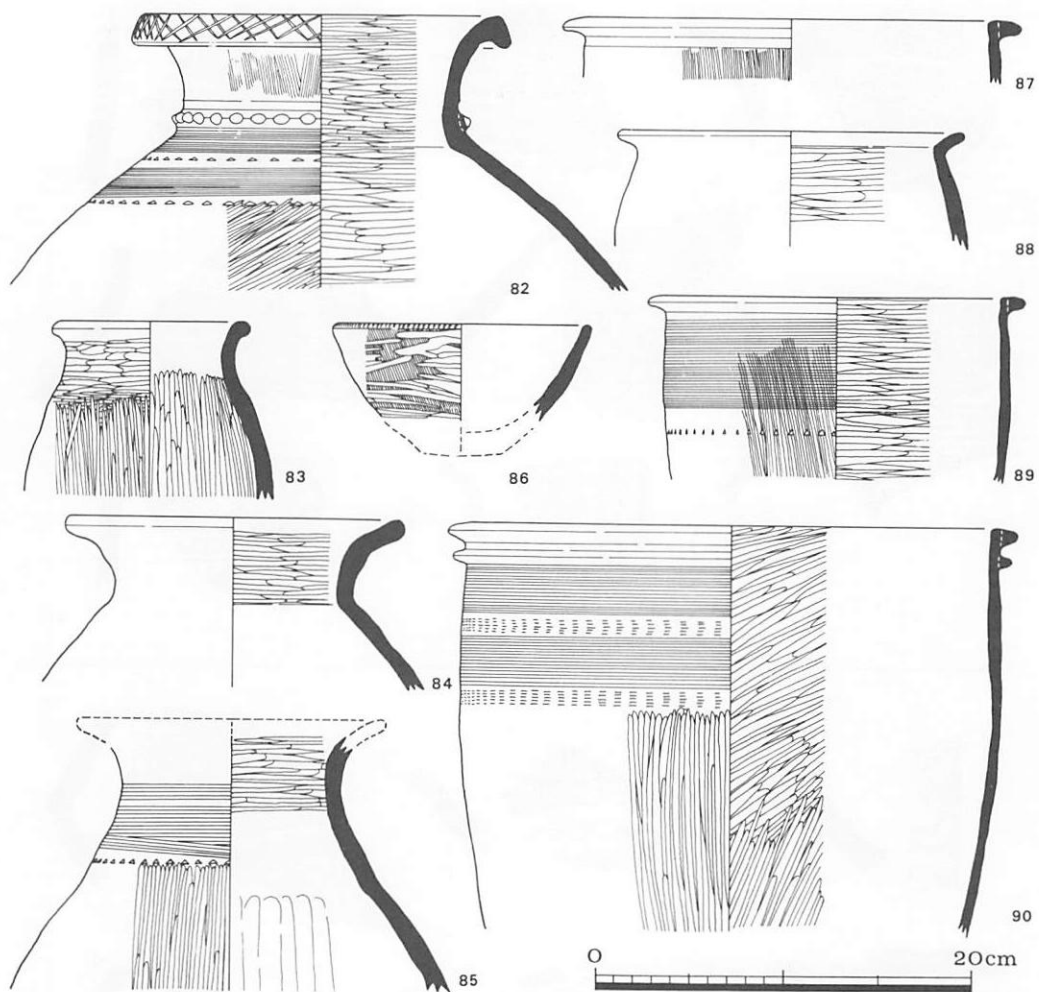
第 8 图 土器実測図Ⅳ SD001上層



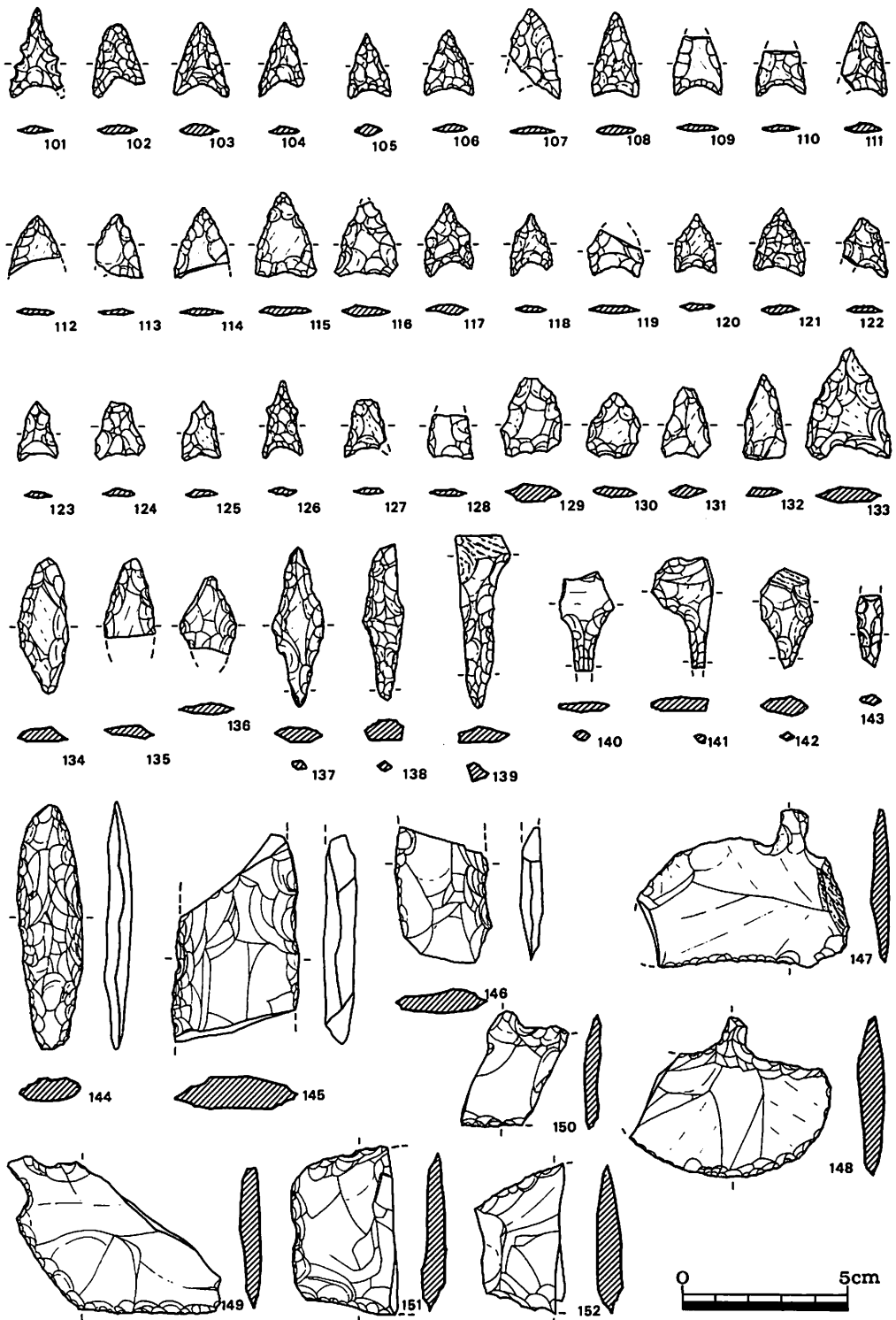
第9图 土器实测图V SD001上層



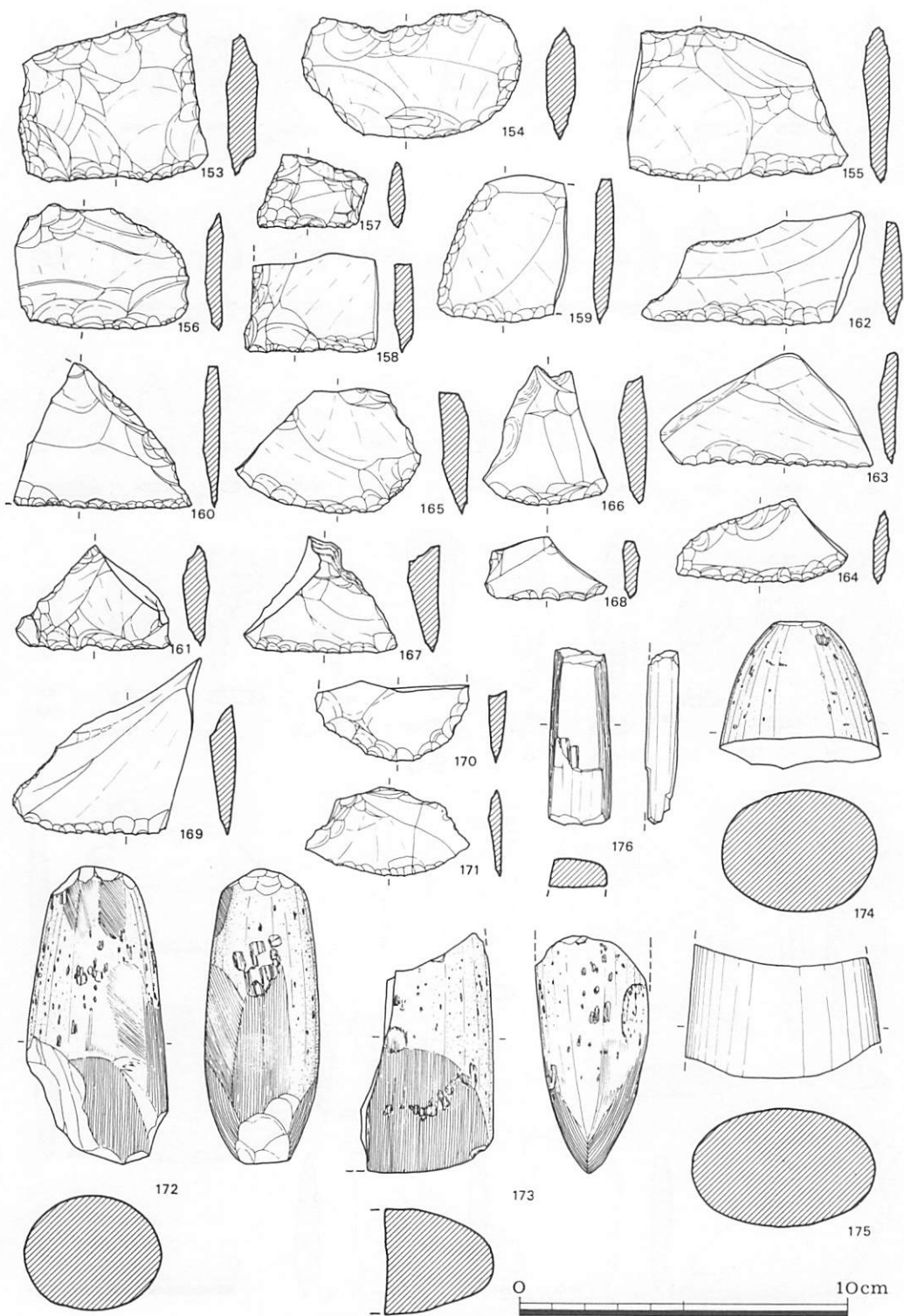
第10図 土器実測図VI 61~68はSD001下層, 69~81はSD001上層



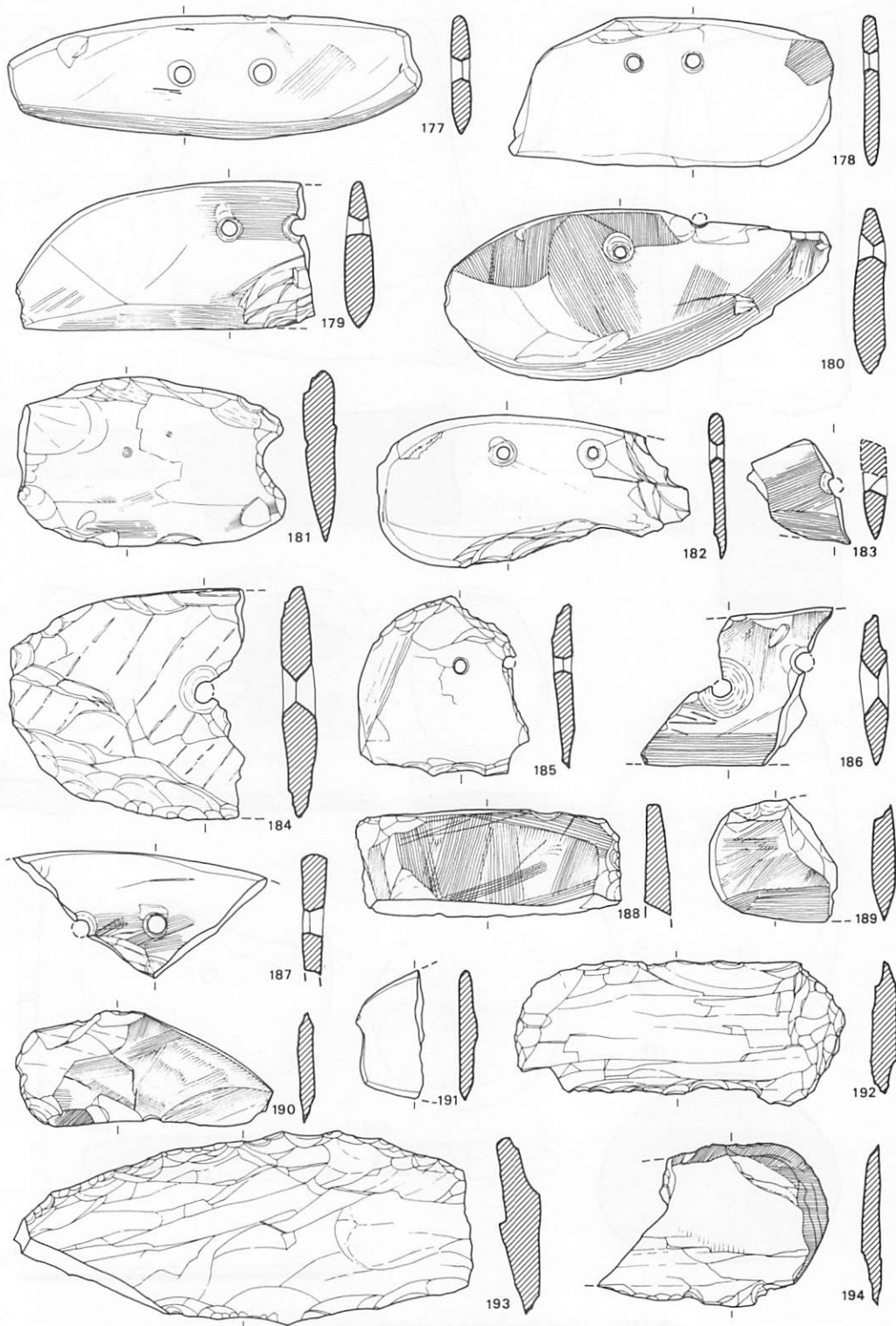
第11图 土器実測図Ⅶ SD002



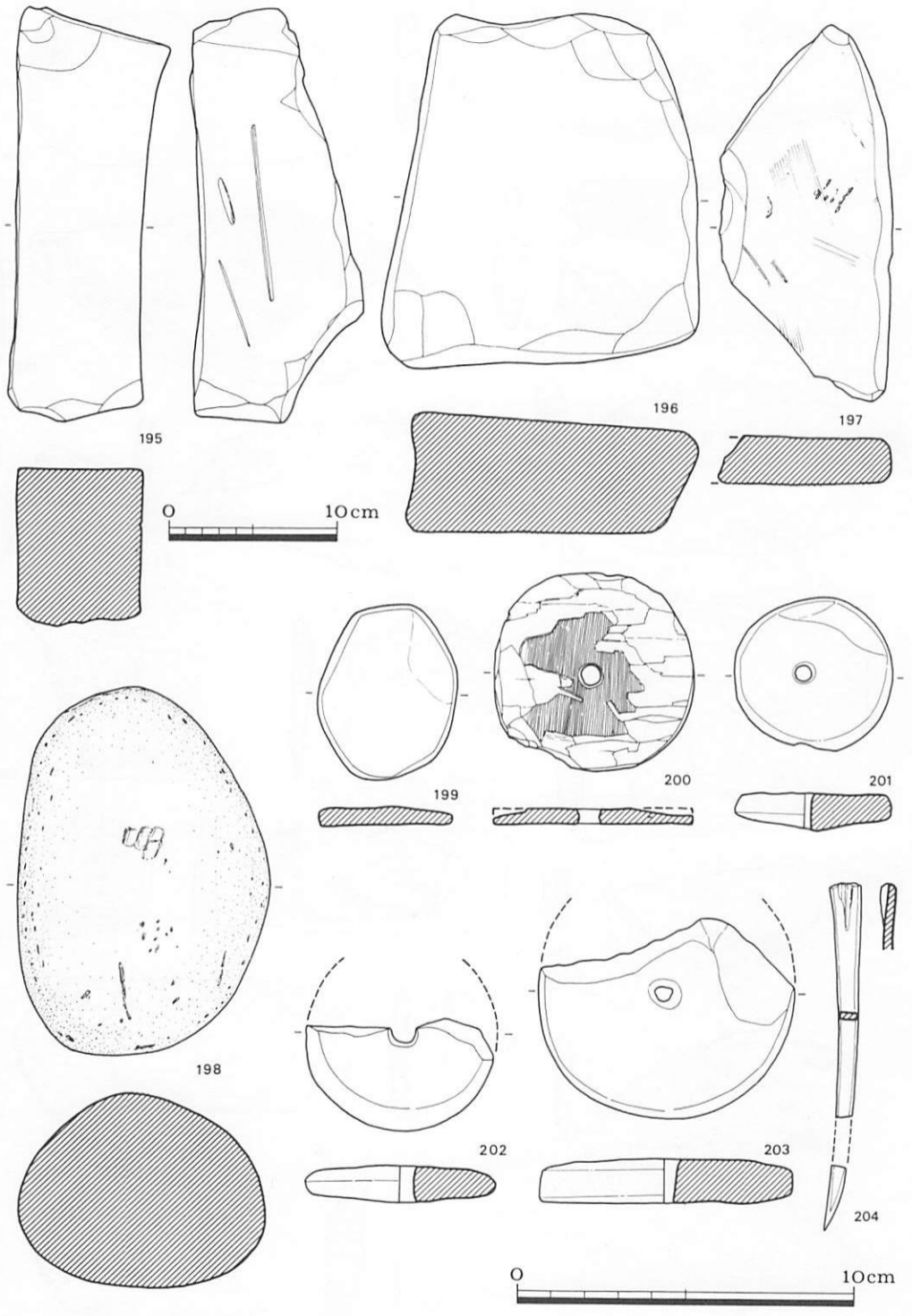
第12图 石器实测图 I



第13图 石器实测图II



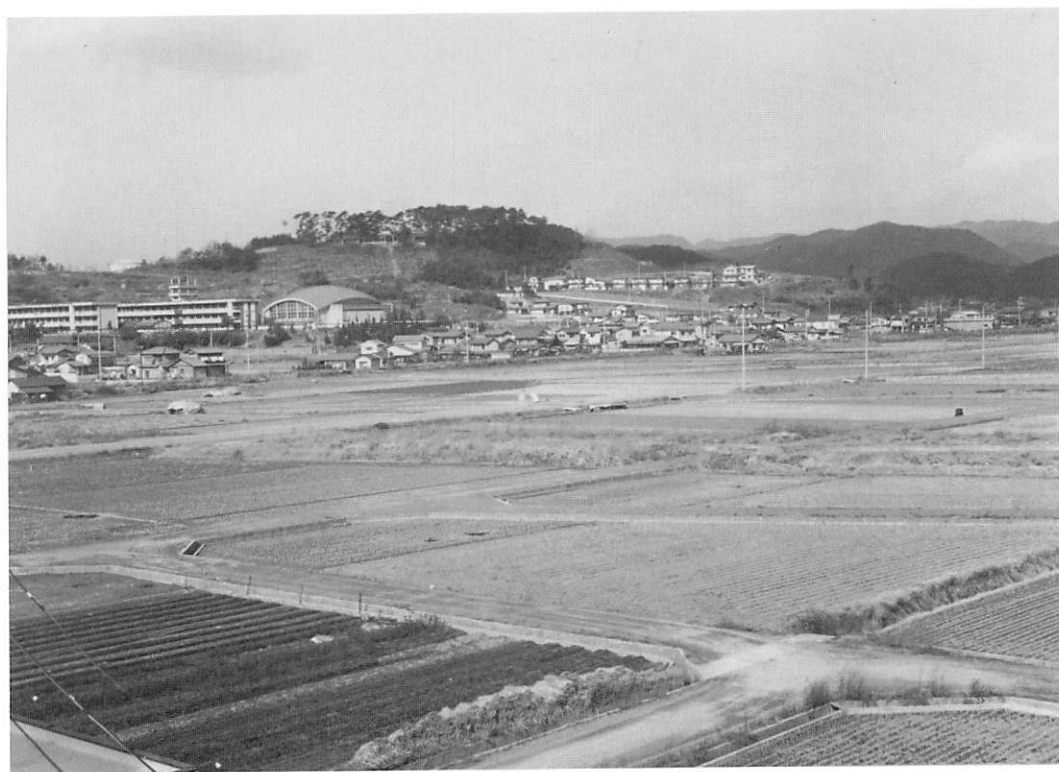
第14图 石器实测图Ⅲ



第15図 石器実測図Ⅳ・土製品・骨製品実測図

版 圖

図版Ⅰ 大宮遺跡全景



▲南より遠景 ▼南東より

図版2 27区全景



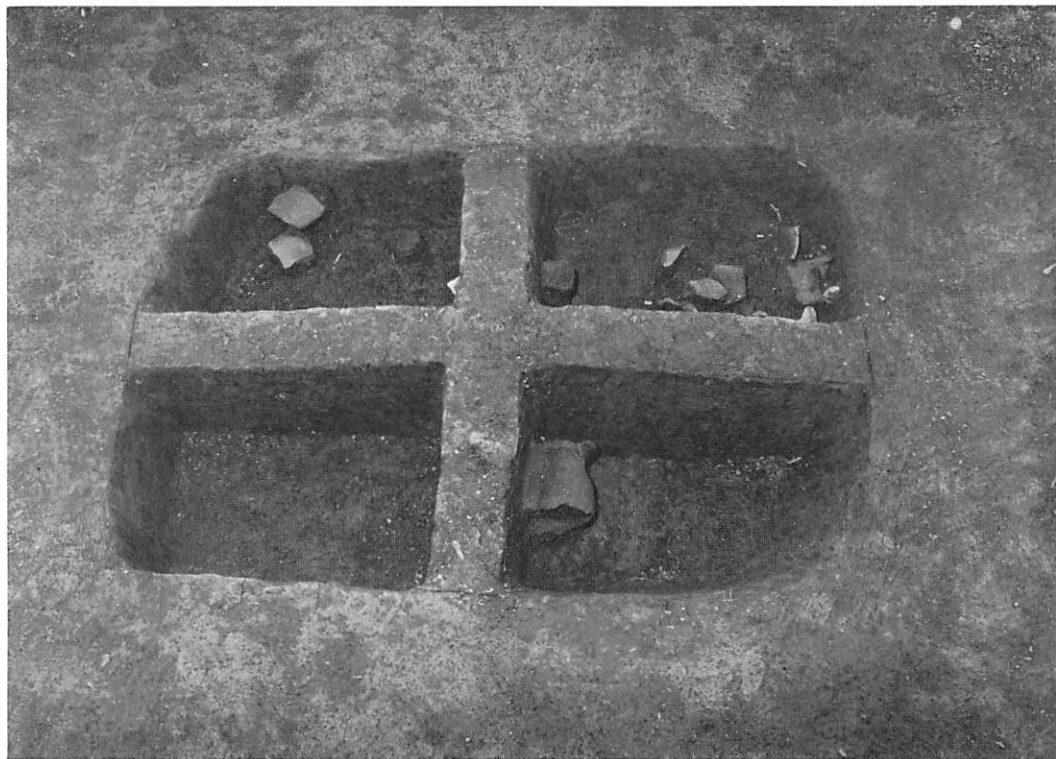
▲東より ▼西より

図版3 検出遺構 I



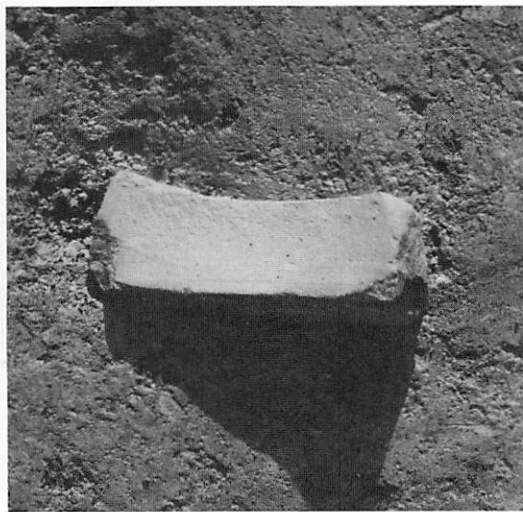
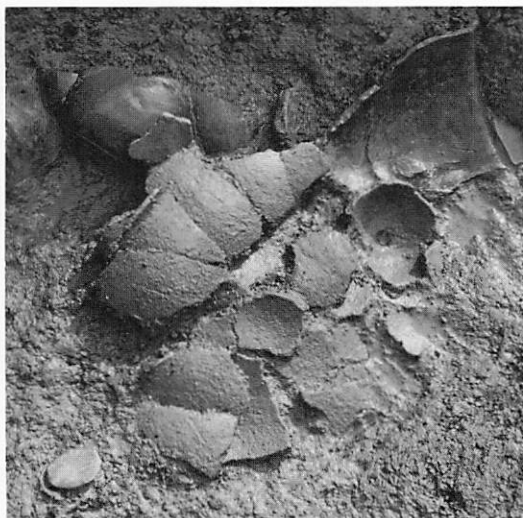
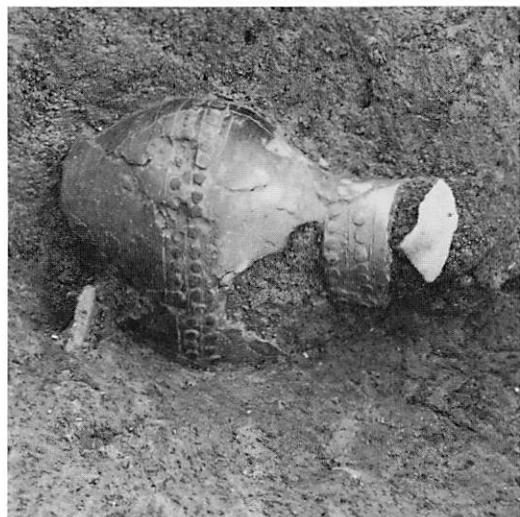
▲SD001北壁断面d-d' ▼SD002北壁断面e-e'

図版 4 検出遺構Ⅱ

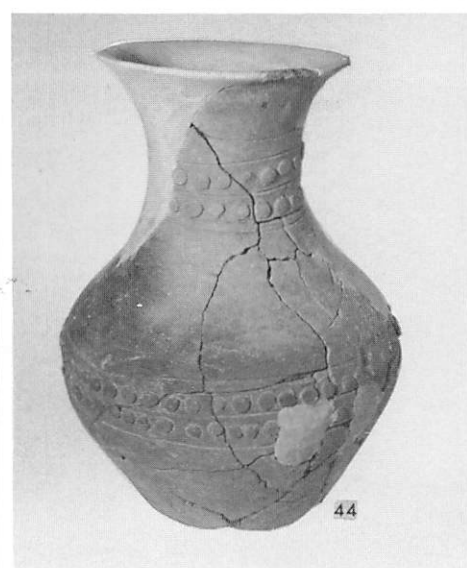
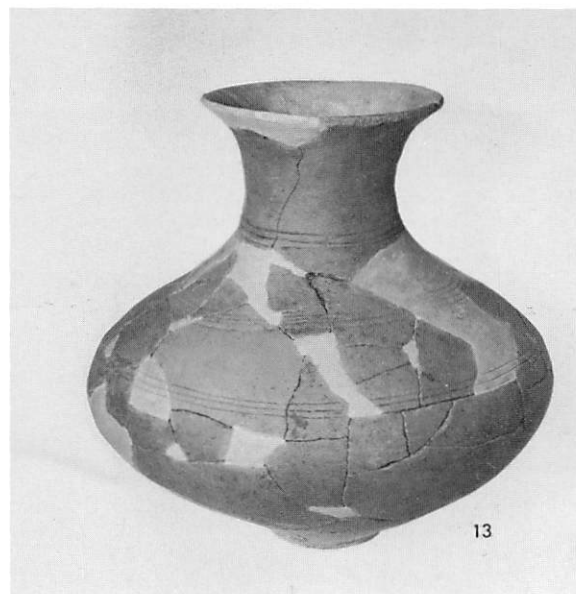
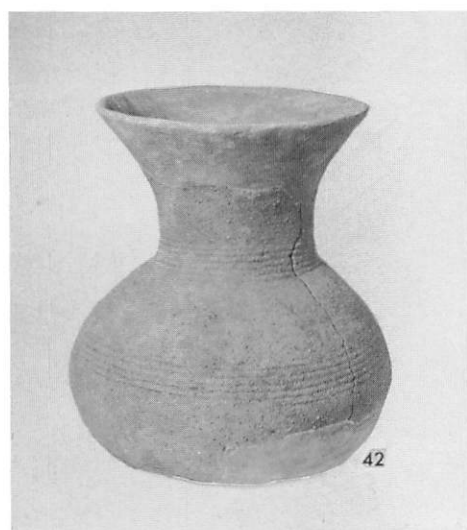
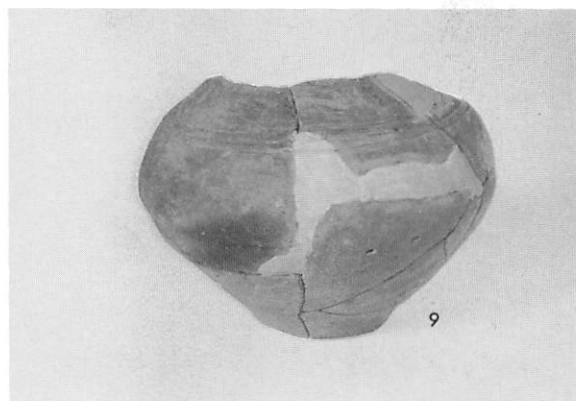
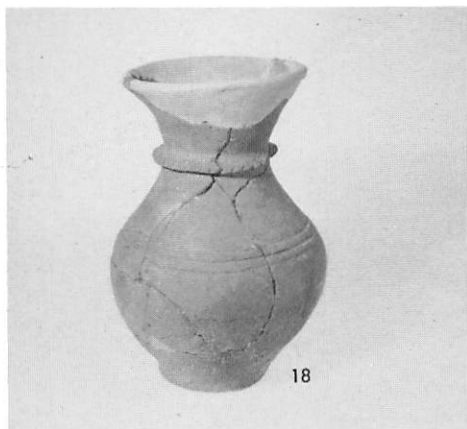
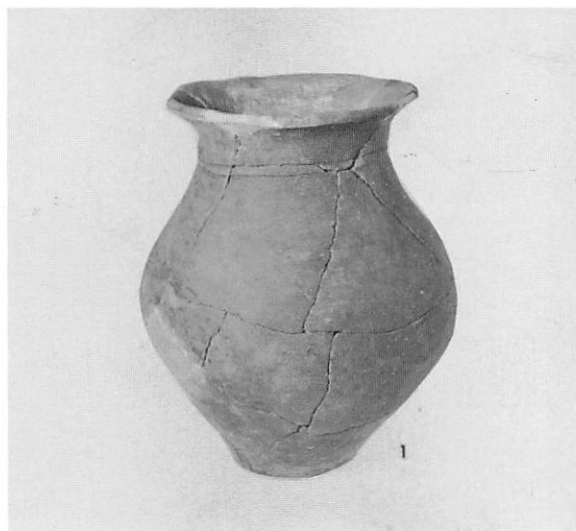


▲SK013土壇 ▼SD001溝焼土面

图版 5 遺物出土狀況

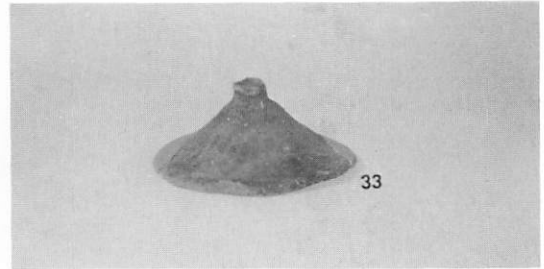
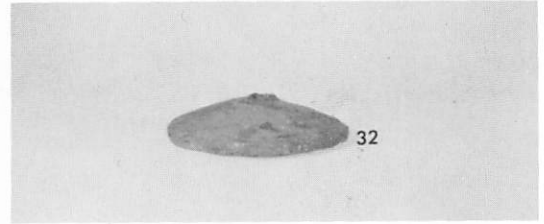
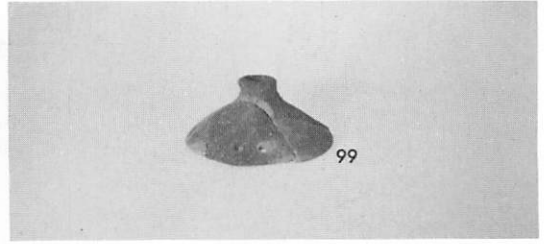


◀▲弥生土器壺44 ▲▶同壺18 ◀■同壺42 ■▶同壺47・円盤199 ◀▼石包丁178 ▼▶砥石195



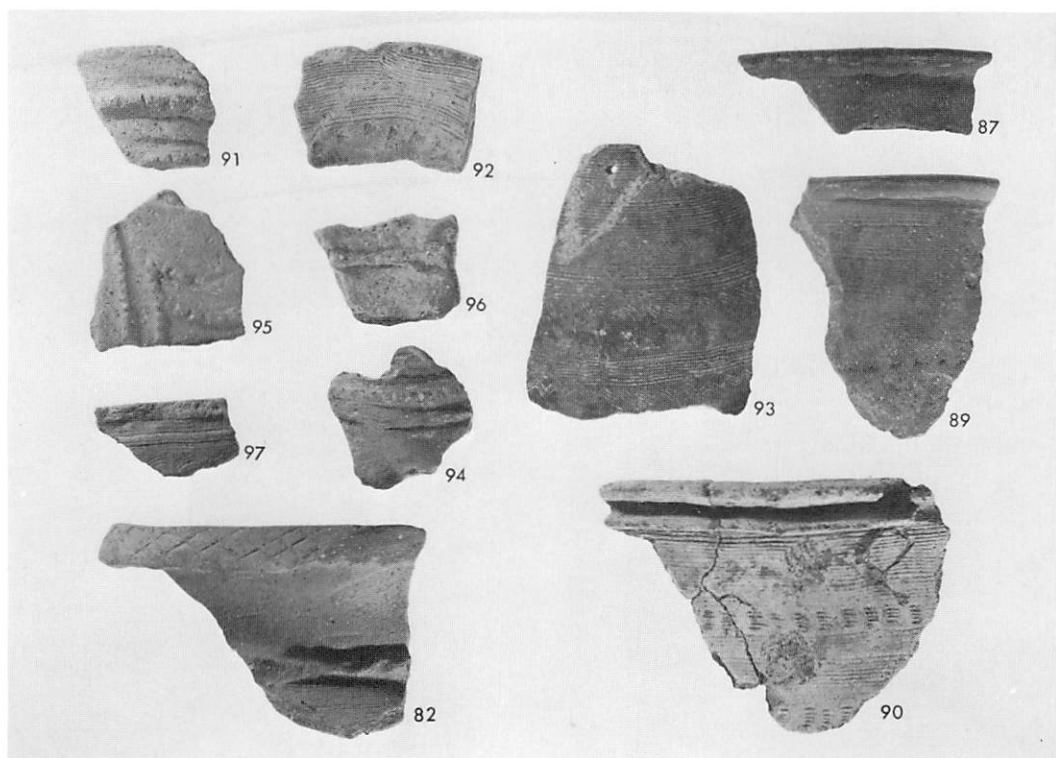
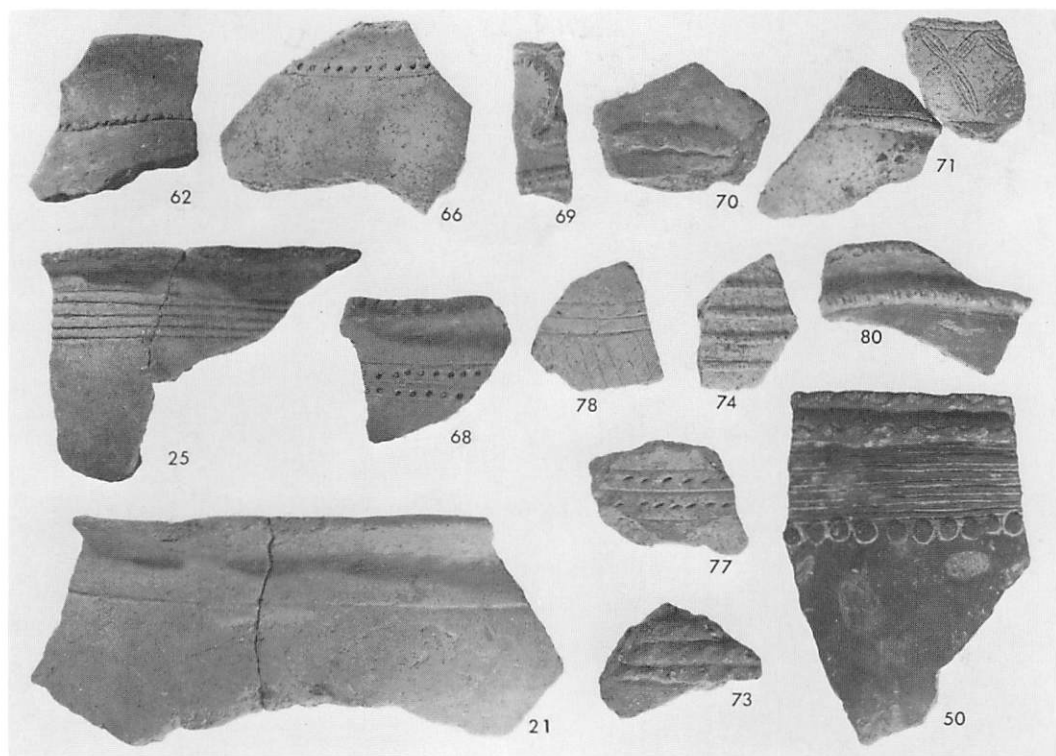
弥生土器壺 1・9・18・42・44(1:4), 13(1:6)

图版 7 土器II



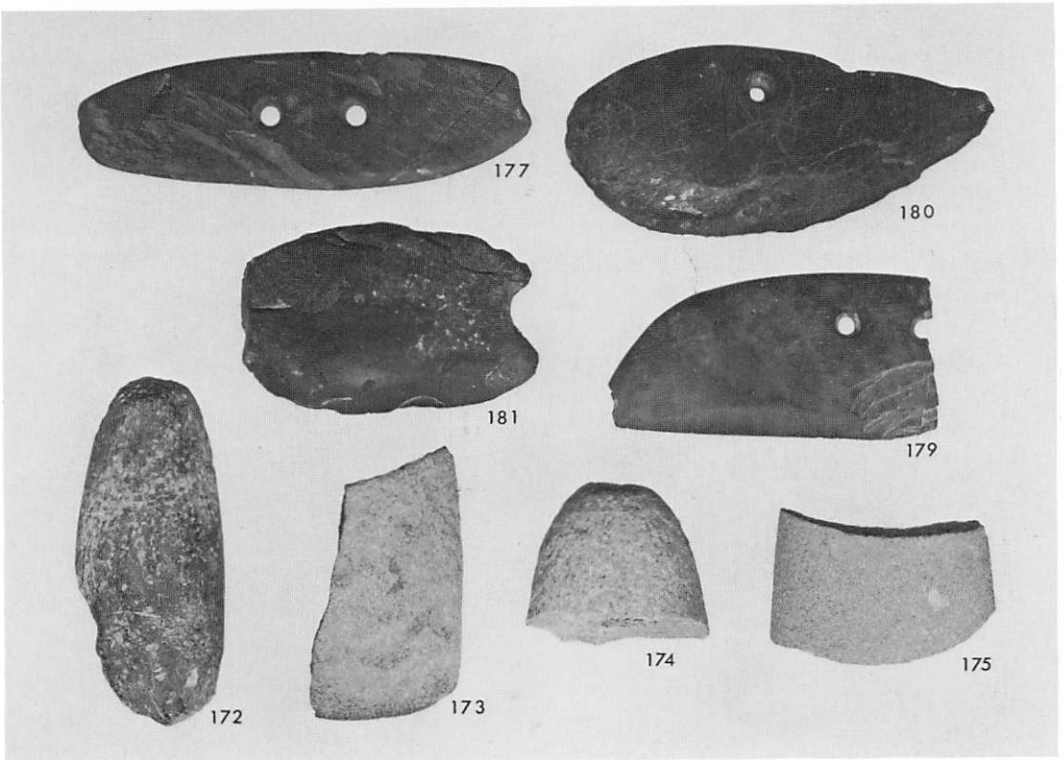
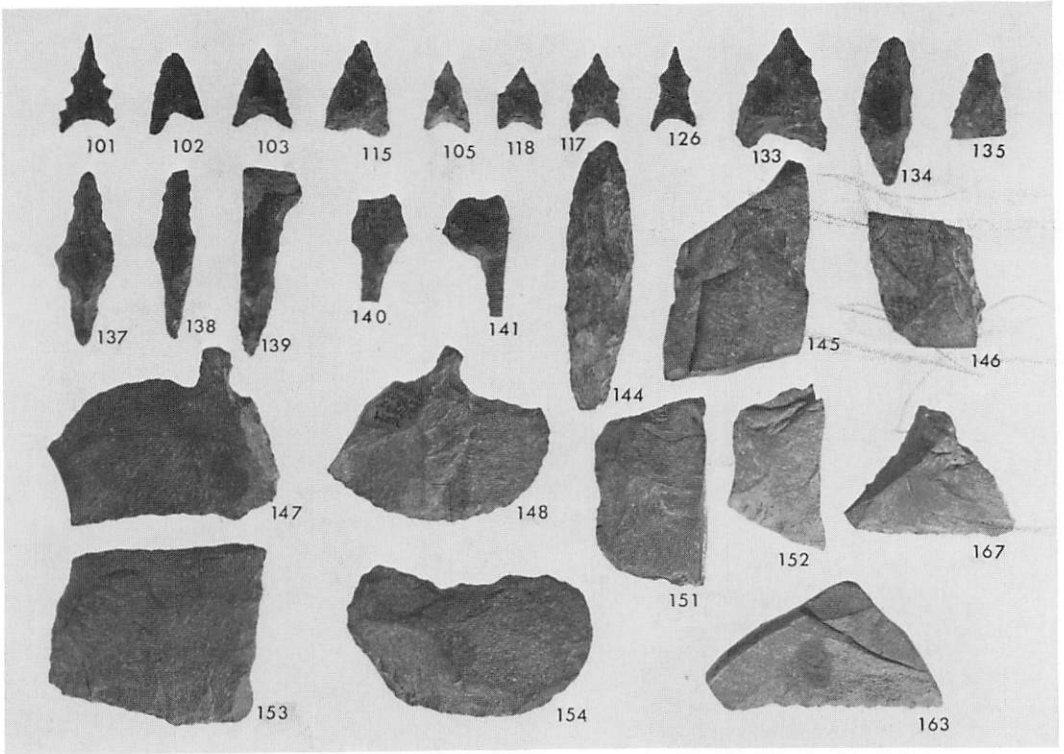
弥生土器甕47・98<1:4>・28<1:5>, 鉢29<1:4>, 蓋99・32・33・35<1:4>

图版 8 土器Ⅲ



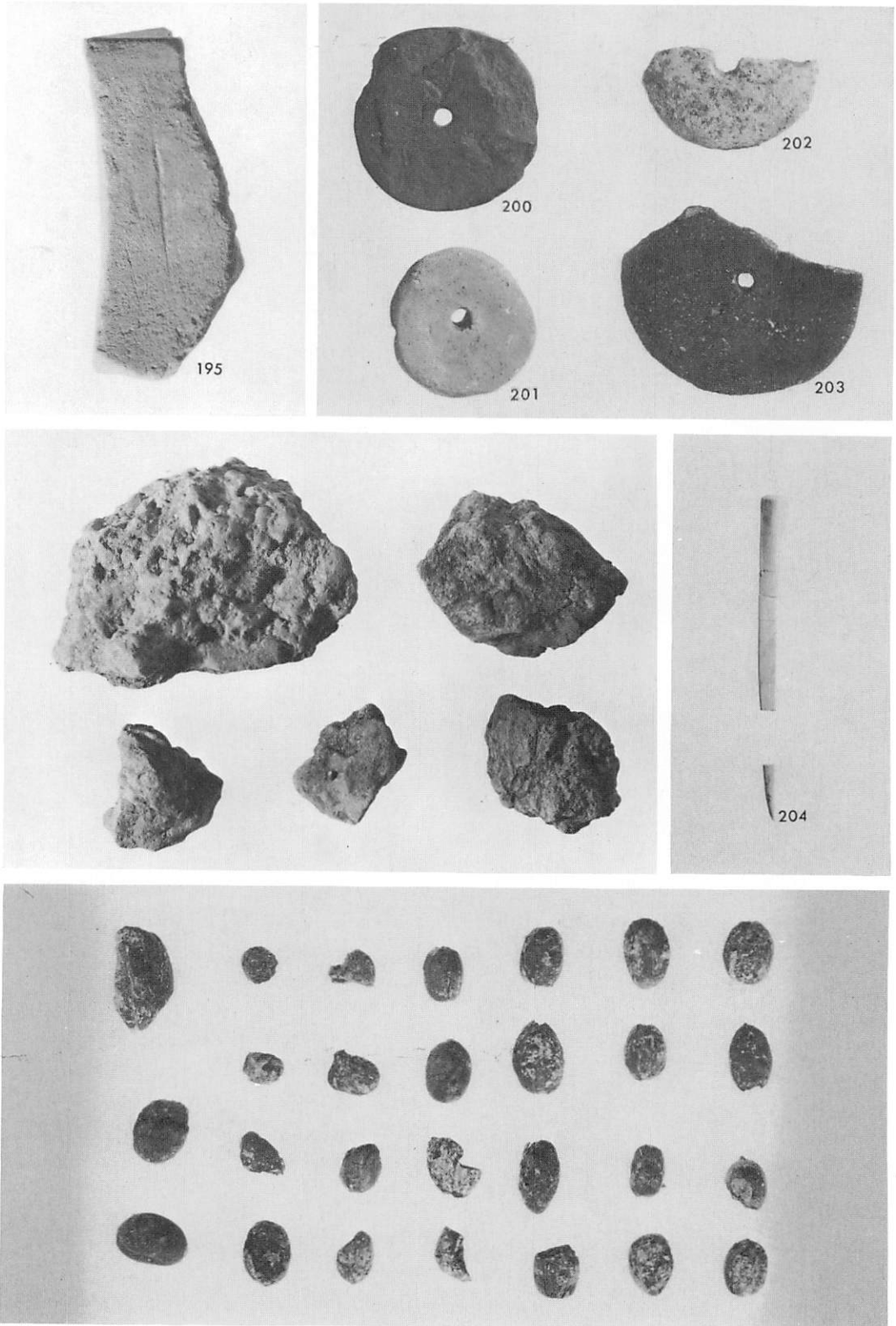
▲SD001溝出土土器 ▼SD002溝出土土器<1:3>

图版 9 石器 I

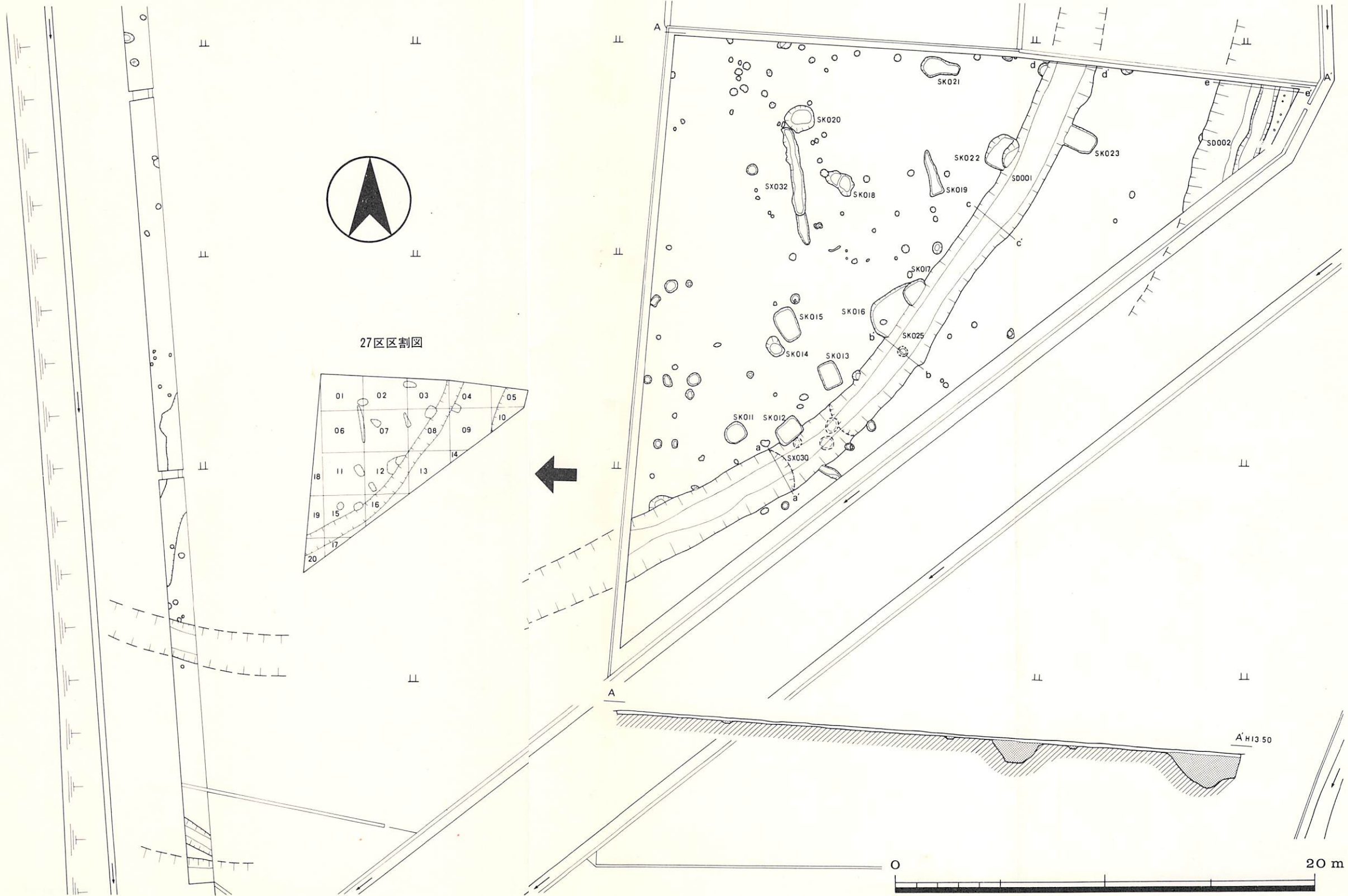


▲石鏃・石錐・石槍・石匙・刃器 ▼石包丁磨製石斧<1:2

図版10 石器II・土製品・骨製品・種子



◀▲砥石<1:8> ▲▶紡錘車<1:2> ◀■粘土塊<1:2> ■▶骨針<1:2> ▼種子<1:1>



27区区割図

第3图 27区平面图

大宮遺跡第1次発掘調査概報

1978年3月31日 印刷発行

編集 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
福山市花園町1-5-2
TEL. 0849-31-2513

発行 広島県教育委員会

印刷 アート印刷株式会社